# 日清開戰

152
1027

091819-000-0

特64-368

日清開戰おどけ文庫

瘦々亭 骨皮道人／著

M27

DBO-0336

特64
368

日清開戰

# おどけ文庫の序

書肆桑堂主人一日道人の書齋に來り小說稗史の類も少しく案ず風變りて面白く且つ能く賣さうな原稿は無きやと道人其返答に困らざるを得んや去りながら相談に掛られて見ると万更惡い心持もせざるゆゑイヤ暫しれ待下されいと彼處

より一枚此處より一枚恰かも紙屑の糶賣でもするが如くれどけ半分に有合の原稿を數種取出して之を見せたるに主人は大に喜び と云ふ程でもないが折角拜見した物ゆゑ然らば是デモ頂戴して參らうと實はデモの一語を添て持歸りたり而して今や之を鉛字に附し其書名を需むるに依り道人近頃の流行に倣ひ題しておどけ文庫と云ふ蓋しおどけ半分に手文庫より探し出したる原稿なれば なり諸君幸ひに其まづい處は極内とし若し御意に叶ッた處があつたならば御遠慮なく れ譽下さるべしとおどけ半分に骨皮道人識す

明治廿七年第九月中旬

○おどけ文庫

目　錄

◎おどけ小説
○しくじり男
◎おどけ話し
○痴話喧嘩
○片言
○一回小説
○自轉車と機轉車
○某候補者の失敗を悔む



○大典句
○昔し噺し忍ぶ草
◎おどけ文
○小女の義太夫を聞て感あり
○雪の説
○寒詣
○俳句の口眞似
○町名の改正を望む
○改良芝居の噂を聞て感あり
○暑中見舞のお世辭
○狂詩の効能

◎おどけの種々
○折衷動物の譜
○新作一ツトセー節
○お菓子な口上
○頓智問答
○初夢出鱈目判斷

おどけ文庫目錄終



## 日清開戰おどけ文庫

一ツトセ「一際目に立つ日本刀
切味ためすは今なるぞ　何の此身も厭やせぬ

二ツトセ「船で乘り出す海軍も
おかでせめ行く陸軍も　進めば忽ち打碎く

三ツトセ「皇國の旗をばおし立て
海外ばんりに名を揚る　やまと魂い外にない

四ツトセ「よろの見る目も勇さましや
牙山に消行く支那の兵　最早降參するだらう

五ツトセ「勇で乘り出す日本海
支那の軍艦一ト呑みに　勢ひするどき我兵よ

六ットセ「無理を知らない豚尾國
大鳥公使にけやぶられ　いよ〳〵朝鮮獨立す

七ットセ「何がどうした豚尾兵
ドシ〳〵打たとしま沖　ポンと破裂すい雷か

八ットセ「やぱん極まる豚尾國
軍艦取られて逃て行く　命が大事の豚尾坊主

九ットセ「國を人手に渡ろふが
命ちが大事の支那の兵　廣い國でも樣はない

十ットセ「とう〳〵今度のせんろうは
錦きの御旗を輝やかす　ぱん國一ばんに

十一ットセ「いちをしらない豚尾兵
朝鮮平壤にたむろする　蠅にひとしき烏合兵



十二ットセ「にくき豚尾兵拂はんと
朝鮮政府は我國の　大鳥こうしに依賴する

十三ットセ「再三手なみを知りながら
無智の支那兵日本の　旭のみ旗にぶれいする

十四ットセ「しなのべきんをとと〳〵く
きつて取んと進みもく　和國心のたのもしさ

十五ットセ「五時間ばかりの戰ひに
豚尾疲てにげいだす　牙山の旗風こゝちよさ

十六ットセ「ろくに知らない軍法を
たのみて死、傷は數知ず　日本の分捕山をなす

十七ットセ「七月三十日の曉は
日本の日丸れい〳〵と　牙山の旭に輝やかす

十八トセ「はげみし日本の軍人は
暑さ寒さもかへりみず　屍ハ野露に曝すとも
十九トセ「くにの威光を海外に
しらす日本の大勝利　古今み聞のいさはしぞ
二十トセ「日本の旗章をおしたてゝ
東洋の全州を安泰に　天地を枕にしてみたい

○軍人となりしはよつぽとかほうもの君と國家につくさん
ちうで死でも朽ない招魂社　チヤ〳〵ラカチヤン
○海軍の働きいよつぽとゑらいもの支那の軍艦うばはんち
うて煙りのなかでめつちや〳〵　チヤ〳〵ラカチヤン



○七月の二十五日は日本の大勝利沈めたばかりじや氣が癒
ぬチウで軍艦を擒にす　チヤ〳〵ラカチヤン
○支那の海軍いよつぽとゑらくちなし軍艦とられちやかなは
んちうで逃出す本國へ　チヤ〳〵ラカチヤン
○朝鮮のおざんせんろうよつぽとすおいもの和國魂にのな
はんちうで支那人めつちや〳〵　チヤ〳〵ラカチヤン
○日本の大島公使は余程ゑらいもの朝鮮政府を助けんちう
で支那公使めついや〳〵　チヤ〳〵ラカチヤン
○此頃の新聞號外よつぽどうれるもの朝鮮事件でもうけん
ちうで外の事件はめつちや〳〵　チヤ〳〵ラカチヤン
○かぽちやの妾はよつぽとあほうもの支那へ一ッしよに行
かれんちうでぱらんでめつちや〳〵　チヤ〳〵ラカチヤン

◎洋服の束髪あたまは余程をつなもの。開けぬ日本にや閉口ちうて、金歯で苦笑ひ　チヤ〳〵ラカチヤン

◎菊五郎のおやつす人形はよつぱとうまいもの。ダーク一座れかなはんちうて賣出す市村座　チヤ〳〵ラカチヤン

◎箱入の西洋煙草はよつぱとおつなもの。税金すあしも出さないちうて、一人て大いばり　チヤ〳〵ラカチヤン

◎汽車の便利ハよつぱどおつなもの。あひの宿々とまらんちうて宿やはめつちや〳〵　チヤ〳〵ラカチヤン

◎電話電信余程早いもの。しやしんツヤ苦説が聞れんちうて取出す貯音器　チヤ〳〵ラカチヤン

◎縁を切れどはよつ程罪なもの。出雲の神さまきこえんちうで、きしやうせいじがめちや〳〵　チヤ〳〵ラカチヤン



# おどけ文庫

## ◎おどけ小説　しくじり男

骨皮道人著

「[illegible]しやも」の根牌、此居へ飛込だ二人の男、何處の者か[illegible]一人は猫六一人は狆九郎と云へり、何れも女[illegible]の質、夫と見るより小女が二三人異口同音に黄色な声で「[illegible]ツしやァーイ」と呼べり、二人は下足札を手に持て坐敷に通り、ハテ何の邊が宜からうと坐中を見渡せば中々繁昌家と見えて满壇已に立錐の餘地もなく、何處も彼處

ゴ〳〵と迫合て居るなれども只突立て居ては腹も膨れぬゆゑ、先づ少しの空地を見付て其處へ差向ひで胡坐をかき

猫六「オイ姉さん牛で酒二升　玄「ヘイ……三十一番お二人さん牛で御酒二升――と吐鳴る其中女が牛二人前と酒一本を運び來たれど、狆九郎は元來酒を飲ぬ男ゆゑ只牛肉ばかりムシヤ〳〵と食ひ猫六は酒に眼のなき底扱上戸なれば頻にがブ〳〵と酒を飲み口から出任せの誤多句を並べながら居列ぶ客の話しを聞けば隣に坐ッた二人の書生、

甲「君やア此頃長瀬に逢ふ事があるかヤ

乙「ウンニヤ些ッとも逢はぬ、尤とも先月ちやッたけ逢ふたときに何處かへ下宿替をするチウて居ッたが、何處へ行き居ッたか知らんヲヤ



甲「さうか彼處にやアずう居らんかや、どうも失敬な奴ちやア長瀬ほど失敬極まる奴いないぞ、

乙「長瀬に何か用があるのかヤ

甲「あるとも〳〵大ありちや、彼は何日ちやッたらうモウ三週間も前の事ぢや、同縣人の懇親會があるのちやが羽織が無くて困るから君の紋付の羽織を今日一日だけ貸て呉チウて來たのぢや、僕もタッタ一枚の羽織ぢやからねへ夫を持て行かれちや困るけれど、折角さう云ふて頼むものぢやから貸て遣たのぢや夫から君一日處か二日經ても三日經てももう是れ其日から三週間にもなるがないまだに返し居らんとい實に失敬な奴ぢやないか、

乙「夫やア駄目ぢやぞ、彼の男に物を貸たら到底返しやせん

夫やアもう典物にしたやら賣て仕舞たやら分らないぞ

甲「彼の男は其樣な奴ちやないと信じて居ッたが、さうか其樣な亂暴な男かや、夫やア僕の失策ちやッた、

其次にハ商人らしい三人の連にて

甲「此家も大分賣出しきしたねへ、此位客があると隨分儲かるでせう

乙「左樣サ是で一人前に付て何の位もうかるか知ら先づ二錢づゝとしても百人の二圓千人の二十圓ですね……イやさうは儲からないか知ら

丙「十二其位な割にやア屹度行くでせうよ、全躰食物店はどの儲る商賣はありませんからねへ、私の懇意な者に酢屋をして居る者があるが其男などの話しを聞て見ると、先づ



角兵衛は當り前で少し間抜子よく行やア其上に家族の食ふ飯だけはウハで出ると云ひますからねへ、尤も此位な場所で此の位な店を持て奉公人も是だけ大勢使ッて居ると餘ッぽど旨く遣て儲けなけりやア遣切ませんよ

× × × × × × × × × × ×

其次に五六人で車坐になつて居るのは田舍の人らしい客なり、

甲「私ィはア牛肉チウものヲ初めて食て見たアだが是やアはアの何の身だんべエ

乙「お前さまアまだ是を知らッしやらねへかよウ、是やアは牛の肉だアよ

甲「是やアは牛の肉かアよ、何たらハア旨へもんだんべエ、
私イはア初めて食て見ましたア、だ、此様に旨へもんなら
ハア私がの牛も打殺して食て遣んべエか知ら
丙「さうよなア、お前さまア家の牛もモウひやア役に立ねへ
様子だアから、寧ろの事ヲハア打殺して熊の膽を引コ抜
てよ、其あとの身を食て仕舞やア世話アねへかも知んね
へ、其時にやアハア私も呼れて行きすべエ
丁「權右衛門どんやお前さまが何を云はッしやるだア牛を
殺したアからチウて熊の膽が取れるものかよ
丙「夫やアハアお前さまが知らッしやらねへのだア熊の膽
ちやア、牛から取たのが一番良品のだに
丁「何よ夫やアハアお前さまが知らッしやらねへだア熊の



膽チうものア馬の腹から取るもんだアよ
其辺りにい職人躰の男、股引腹掛に印し半纏を着て威勢よく
胡坐をかき
甲「とうだい奴子ヲ是から例の樣へ繰込うか
乙「宜らう、然が何時でも自已ばかし受愛て氣の毒だからな
ア
甲「笑かしやアがら自已ばかし受愛もねへもんだ、此間の調
子合なんテーな無かッたぜ、宵チラの三日月なら未だ宜
が手前なア丸で暗の晩だから嚴しいちやねへか、ナぜ手
前は其樣なに何時でも擯斥るンだらう本當に自已やア
不思議でなられへよ、友達の慾目で見るせへだか知らね
へが、手前だッて眼の付べき處にやア眼がついてるし鼻

のゐる處にやア鼻もある……尤も眼尻い少しダラ付と來て居るが夫だッて無へよりか增だし、鼻だッて豈たァ　ピンヤンコで横ッ廣がりだけれど夫だッて人間並に面の眞中に附てるンだから其樣なに何も行く度びに擯斥る氣遣ひもねへ箸だが、手前は餘ッぽど女旱の生れつき　と見えるなア

乙　オイ〳〵誰に斷ッて來て此の業平を打こなすのだい……マア宜やどうせ色男は敵き役だ怨まれても仕方がねへ、

と互ひに自慢を吐て女郎買の相談らしい話しを聞て猫六と獨九郎も負ぬ氣になり私窩子買の話しを女郎買に鯱直して嘘八百を饒舌ッて居ると隣に坐ッて獨酌して居る客が微醉



機嫌で言葉をかけ賣い此奴すこし風違りの奴らしいから胡麻化して遣んと思ひ　客　旦那大層御愉快ぢゃ話しですねへ、旦那と云われた一言に二人ハズット乘氣になる是より何事を云ひ出すか次回を讀で知りねかし、モ古いか〳〵

×××××××××××

旦那と聲をかけられて乘氣になった二人連は急に勿体らしく振返り　艶　イヤさう眞面目に出られちゃア恐れ入谷の杜鵑ッてケス……　時にお前さんはお一人ですか、マア此方へ入らッしゃいと云へば彼の男はメ子の兎的と思へど色にも見せず　客　恐れ入ります……　實は餘りお話しが面白さうですねッ　イヤ言葉をかけました　猫六「マアサ其樣な屈痴堅ひ事を云ひたもふな袖摺遣ふも他生の緣と云ふちゃアありませ

んか、と其男を無理に引摺り込で一所に常談を云ひながら飲で居る中に其男もだん〳〵酔が廻ッて來て　宮どうぞダメ斯してお互ひに心を打明て酒を飲と云ふのも是も何かの因縁でせうから、ナント是から三人で押出さうぢやありませんか……ナーニいくら君達が不案内でも其處は僕がナヤーン、と心得て居るから宜しい……僕は斯う見えても口廣い事を云ふぢやアありませんが、花街の事と來た日にやア一から六まで大呑込の懇々知己で、縱へば何樣には女郎が何疋居て彼奴に逢にやア斯う云ふ情死が附て居る何樣の誰は口前は旨いが薄情の手固摺者だと云ふ處から、故郷年齢は勿論ッ、親々類兄弟の有るなし、其他引手茶屋の内幕魂膽盡の損徳彼處の溝板い破損て居て是までに按摩が何人轉んだ、何處の下水い掃



事が無いから子子が何万何千何百何十何疋溜て居ると云處まで、殘らずお茶の粉で飲こんで居るから、縱ひ紀文大盡が一大隊來やうとも仙臺樣が珠數繼がりて遣て來やうとも君達に恥を搔せるなんヲ其樣な屈間な事は致しやせんと素敵滅法界な大法螺を吹廻すにぞ、下地い好なり御意は宜しの二人い手もなく其の口車に乘り　猫六「夫れぢやア是から出掛やうか狆公どうだい　狆九「どうの斯のもあるもののいい無論繰出すべしサ、と牛屋の勘定をすませて外へ出て　狆九「時に自己やア狆九郎此奴ア猫六と云ふ男だが、お前さんの名は何と云ひますね……是でも一所になつて行くにやア名を知ッて居ねへと不都合だから　宮達へね、僕ァ名を云ふ程の人間でもないが君達の名が猫六に狆九郎と云ふのなら僕の名前

は犬五郎とでもして置きやせうよ　猫六「夫ちやア犬さん今夜の處はワン分にも宜しく頼みやすぜ　狆九「アハヽヽあれでも何分にもの酒落の積りだから可笑いと常談を云ひながら犬五郎の行く通りに後から附て行ときに　車夫「且那歸りですからお安く參りませう　犬五「お前何處へ歸るのだ　車夫「何處へでも歸ります　犬五「こいつア奇妙だ夫ちやアお前の家は何處にでもあるのかい　車夫「イヽ私ちの家ハ蝸牛も同樣ちの車一挺が私ちの家ですからケットを被ッて提燈の股火で行きつきパッタリ何處へでも寐ます　犬五「此奴ア面白い夫ちやア乘ても宜がお前の車は二人乘で此方は三人だから迚も一所にやア乘れまい　車夫「ナーニ大丈夫且那の方で豈と窮屈なのを我慢せへして下さりやア私ちア曳て行きます此節の人ア皆な南京米を食つて居るのだから米の安い時の小僧二人乘たより餘ッぽど目方が輕いから樂に曳けます　車夫「人を馬鹿にして居やアがるなア害生め

×××××××××××



犬五「夫ちやア何の車へ乘るのも同じ事だからマア乘て見やう……サア二人とも お乘なせへ　私やア道案内だから前へ乘ます　猫六「ヤットとつあいしよ……オイモット尻を其方へ遣りねへ……　邪魔な處に腎を突ッ張て居るちやアねへか　狆九「よく色々な事を云やアがるなア……サア是で宜だらう……オイ手前も此樣な處に腎を突ッ張て居るちやアねへかオヽ痛へ〳〵　猫六「此奴ア窮屈だ　狆九「窮屈だつて些との間だから我慢しねへ人形

は箱の中に這入て居らァ……サァ犬さん乗なせへ　大五郎宜しいかね……コレどつこいしよと　猫六「オ、重い〳〵隨分大きな尻だなァ此奴でナー〳〵と一ッ遣れた日にやァ潰られへぜ　大五郎「夫やァ何とも知れれへ僕ァ平生はさうでもないが酒を飲とドウも頭に出る癖があるから　仲九「酒を飲と出る癖がある……其奴ァ閉口だマァ今夜の處ァ成たけ其癖を出されへやうに願みやすぜ　車夫「宜しう御座いますかね……ヤットどつこい是はのしよいとハイ願みますぜ願みますぜとノソリ〳〵と挽行く後より二人乗の車がザラ〳〵と駆來りて援駐せしを犬五郎は殘念におもひ　犬五「オイ車屋さん銭は何程でも出すから彼の先へ行た車を乗越て先へ行て呉ないかと頼にあせれど彼方い二人を乗せ此方い三人を



乗し事ゆゑ迚も追附べき筈なければ犬五郎は無念かさりなく車の上より腹をかけ　犬五「オイ〳〵車屋さん車の拴が抜たぜ危険〳〵、と云へば先なる車夫は誠とおもひ棒をおろして拴を調べる中に此方は得たりと駆抜れば車を調べし彼方の車夫い目を剝て怒り出し、行んとする此方の棒をシッカリ押へてヤイ　車夫「漂碌玉め宜加減にふざけろイ馬鹿野郎めと弱りし車夫を引倒して滅多無性にナグリ附れば犬五郎は之を見るより二人に目くばせ爲して逃るが勝だと一散走り息をもつゞかずに一町あまり駆け來りて　犬五「どうでゲス、これが三十六計の奥の手でゲス、然が彼の車換の野郎い可哀想に彼の様子ちやァ多分殺されて仕舞たかも知れん南無阿彌陀佛〳〵　仲九「常談ちやねへ本當に酷い事をするなァ

お金に錢も遣ねへで　犬五「さう〳〵錢を遣なかつた然が夫やア彼奴の運の惡いの此方は錢も出さず、怪我もせず本當に運が宜いのだ……エヽト夫やア宜が此處は何處だらう、ハテナどうも變だぞ……ムヽ此奴ア失敗た丸で方角違ひのかへ來た　猫六「シッカリ頼みやすぜ　犬五「ナニ大丈夫なんだッかイ居睡をして居たものだから車夫めが此樣な處へ拽て來やアがッた　狆九「夫ぢや大變に道が違ッたのですか　犬五「大變にも何にも丸で右と左の違ひです　猫六「其奴ア大變だ全躰車夫に何處まで乘て行と云ッたんだねへ　犬五「イヤ是も失敗た初め何處までとも約束をしなかッた　狆九「これやア驚いた行先も云はねへで、車に乘奴も乘奴だが、又た車夫も車夫だ行き先を知らねへで何處へ拽て行く積りだらう……ナシトべらぼうな話しぢやアねへか　犬五「仕方がない是から



又た元の道へと逆戻りだ……ムヽ丁度宜處へ車が來たオイ車夫さん吉原まで三人乘ていくらだと云へば車夫は行き成り脫まくりをして　車夫「コウお前達やア今乘にげをした奴等だな、此の野郎人を酷い目に逢せやアがつたサア涙出所へ來いと無暗矢鱈に威張出たり

×××××××××

車夫に威張出されて犬的も天窓を搔き　犬五「お前は先刻の車夫さんかい其奴ア濟なかつた本當にすまなかつた僕が詫をするから堪忍して呉なさい其代り此處まで乘て來た車賃と、是から芳原まで行く車賃の外に酒手と草鞋錢と蠟燭代と迷惑發するから、夫でマア堪忍しなさい　車夫「さうお前さん

の方から下手に出て謝罪をさるなら堪忍も仕やうが夫ちやア何程下さいますか　犬五「さうサ彼處から此處まで來のが一人前壹錢ッゝと見て三錢に是から芳原までが一人前三錢ッゝと積ッて三々が九錢、夫から酒手が一合三錢と草鞋が一足一錢五厘ろの外に蠟燭が一挺一錢だからして十七錢五厘あげやう　車夫「何を多話言を吐しやアがるのだ此毛唐人め人が默止て聞て居りやア宜加減に嘴言を吐やアがれ……モウ勘辨ね出來ねゝサア四の五の云はずにサッサと涙出所へ來やアがれ、と行き成り猫六の胸倉を取れば猫六は性來臆病者ゆえブル〳〵と震へて　猫六「オイお前何をするのだ危險ちやねへか何も自己がどうしたと云ふ譯ちやアあるめへし……オイ危險と云ふ事よオゝ痛へ〳〵ヤア待ねへな　狆九「



手前が悪いから車夫さんが怒るんだ、サア謝罪ねへ、オイ猫的あやまらねへか　猫六「車夫さんコレ此の通り平地へ手を突であやまります、モウシ車夫さんへのふテー位なもんだ車夫「夫ちやア何にも云はずに一圓下せへ、夫で芳原まで引張て行きやせう　猫六「ソリヤ車夫さん胴慾ちやわいノウ一圓合點が行ねわいナア　狆九「コレサ又た其樣な事を云ふ、然から車夫さんが怒るのだ……車夫さん夫ちやアお前の云ふ通り一圓出すから行く處まで行て呉ねへ……オイ犬さんは何處へ行た、オイ犬さん〳〵……アハゝゝ犬さんも野ン氣な人ちやアねへか、車の中へ這入て高鼾だ……オイ犬さん〳〵　相談が出來た、サア起たり〳〵　犬五「アハゝゝどうもお世話さまアゝ宜心持だ　狆九「サア猫的先の通りに乘ンだ　猫六「また

箱詰の窮屈か　犬五「車夫さん宜しいよ　車夫「オットまかせの七兵衛となガラ〳〵〳〵〳〵へイ御免〳〵〳〵

××××××××××××

車聲轔々〳〵忽ち大門に着ければ此處にて三人は腕車を降り廓内へ這入れば極樂淨土茶屋の二階の大一坐飲めよ謡への愉快連三味線チヤカ〳〵太鼓ドン〳〵、折から聞ゆる謡の聲、

お皿ヒト皿ふゝ皿三さら〳〵、四皿五ッ皿六さらア皿、ドッコイ、チリチヽリッテンなゝアさら八皿アでコン九の皿十枚、十さらア皿。

一同「蛙ヨウ〳〵〳〵　ハッキタ。ドッコイ

蛙ヒトひよこ二タひよこ三ひよこ〳〵四ひよこ五ッひよこ六ひよこヲこひよこ、ドッコイ、チリチヽリッテンなゝひよこヲ八ひよこヲてでコン九のひよこ十疋、十ひよヲこひよこ、



客「コラサーアイ　狆九「なるほど極樂は極樂だけあつて面白さうだなア　猫六「オイ涎が垂るぜ見ッともねへ　狆九「オイビックリした　犬五「サア是から彼處の方を素見て何樓へ登ると仕やう然だ大樓の初會と云ふ奴ア餘まり面白くないものだから矢張り小樓に仕やせう　狆九「何樓でも宜しい自己等は犬さんの行く處へくッついて行きさへすりやア宜いのだと總て犬公の差圖通り彼處此方を素見て居る中に、一人の妓夫的夫と見て袖引ことは禁制なれど、其處は娼妓だけに相手を見ぬき　妓夫「エヘヽヽヽ如何樣でゲス……エ、ヘヽヽヽ多分の御散財は掛ませんでゲして……エヘヽヽヽ御覧の通

り弊樓共は玉揃ひでゲしてエヘヘヘヘヘ「何樓で遊ぶも同じ事だから此樓へ登ると仕やうか　妓夫「ヘイありがたう御坐います……お客樣だよ　男「入らッしやい、

是より三人ハトソ〳〵と階子段をあがりて見通しの坐敷へ通れば後より樓母の婆ァが來りて　樓母「入らッしやいッイお見ろれ申しましたが、お初會樣で御坐いますか、お馴染樣で御坐いますか　犬五「三人とも皆な初會だから樓母さんの見計ちひで成うたけ頗る附の別嬪を周旋つて下さい樓母「かしこまりました、と其携を去りしが間もなく野郎相當の女郎を三人つれて來て、引附を濟ませ　樓母「サァ此方へ入らッしやい、と八疊の坐敷へ案内すれば三人い色男然として其處へ坐り例の駄洒落をペチヤクチヤと饒舌る中に酒肴も



來りしゆゑ、犬的の計らひにて藝妓一名を注文せしに、程なく入り來りし一人の藝妓　藝「ヘイ今晩いアリー　犬五「イヨー藝者の饗應だと見へて大變なお婆ァさんが遣て來たな　藝「お婆ァさんでも宜う御坐いますよ、是でも中にやァ妾しに限ると云ふ人もありまさァね　猫六「さうだらう孫の目から見りやァ祖母さんほど宜、ものァねへからなァ　藝「アラ彼樣な憎らしい何したら宜からうふ年齢でもねへちやねへか　藝「アラまた彼樣な事を云ッて……ヤァ何でも宜のですよ、然から彼の人がさう云ひました、お坐敷へ出た時にやァお客に負て居ろ、其代り自家へ歸りやァ自己が可愛がッて遣からッて　狆九「夫やァ百年も前の話しだらう　藝「百年も前のは夫やァ妾しの阿母ァでさァね、其

様なに人の事を婆ア〳〵と仰しやるけどど、旦那だッてモウ宜、お爺さんやアありませんかオホ、ヽヽヽ

×××××××××××

狆九「自己なんざアいくらお爺さんでも婦人と云ふ婦人は自己が一寸横目でにらむと、後家さんでも娘でも内儀さんでも年増でも、女郎でも藝者でもお乳母さんでもお三どんでも比丘尼でも守ッ子でも皆な先方からコロ〳〵と轉げて御坐るから仕方がねへ「女ところすにや刃物い入らぬ一寸横目で一にらみ」と云ふ位なもんだ　藝「夫やア貴郎ほれて死ぬのちやアありませんよ、貴郎の顔が丸でお化見たやうだから膽を潰すのでさアねオホヽヽヽ　狆九「マアサ其様なに喧嘩をしねへで仲直りに一杯飲ねへ　藝「ハイ頂戴　狆九「ろんなに遠ね



へでもマア一杯飲ねへ　藝「ナニ本當に些とも飲ないのですよ……ハイ旦那お仲直りにお一ッ　大五「オット頂戴針箱煙草盆……オット、ヽヽ泡が立た泡がたつなら此子を抱なテーんだ、藝「イヨ出ました古いのが……一寸お色の黒い旦那お色の黒い旦那か本當に猫公ア色の黒いのちもひ献　狆九「お色の黒い旦那か本當に猫公ア色の黒いのちやア色男だ……是ちやア女難除の札を張なくッても女の爲に命を取られる氣遣へは無へや　猫六「此奴らに寄てたかッて自己に難癖をつけやアがる、好し〳〵是から自己が百面相をして見せるから惚るときかねへぞ、と身仕度をすれば狆的は豫てろのお箱を知る者と見えて傍にあり合ふ割箸を取て扇子に代へ　狆九「トウザーイ一座高うは御坐りますれど不辨なる口上なれて申しアーゲ奉つります、此處元御覽に入れ

まするは左り甚五郎が丹精を込ましたる處の生人形に御坐りまして、栃面屋喜多八がスチヽコ踊りの脇に御坐ります、眼中の働らきから手の振りまわし方脛を叩いて刎くり返る容躰よく〳〵お氣を附られて御覽じませ　猫六「ソラ來たドッコイショ　三味線「スチヤラカチヤラ〳〵　猫六「遠たさの見たさに此處まで來たのに、ヨイトさのコラさの、其樣な事ちやなか〳〵色男にやなれない　狆九「この處お目に留りますれば、此方は無類飛切りの劣嬢小野の小町が雨乞の脇に御坐ります、尻の大きさ加減からニッコリ笑ひし處に嫌味たつぷりの工合お目にとめられて御覽じませ、天窓の腦天から足の爪先までの働らき能〳〵お氣をつけられませアレ彼通り水ッ鼻まで垂しまする　新造「オヤ〳〵きたなければへ鼻汁がお刎



身の中へ垂れましたよ、生人形が水ッ鼻を垂すなんて其樣な事がありませうか　犬五「オーヤオヤ是やア大變刺身が鼻汁だらけに成て仕舞たお氣がつかれたなア……　刎繰かへるのもモウ宜、加減に仕たまへ……ソレ〳〵皿の中へ足を踏こんちやア行ぬへよ……　アレ甘煮を踏付たゾレ又た德利がヒックリ返ッた……オットヽヽ酒がこぼれた是やア大變酒々〳〵こまつたなア　新造「酒落處ちやアありませんよモウお引にしませう、今中引を打ちましたからとせき立られて實は嬉しく　チン九「オイ猫公モウ寢ンだとよ　猫六「ベランメー自己ア母親の腹の中を飛出してから夜でも晝でも勝手に寢て居らア、其樣なに寢〳〵ッて珍らしさうに云ふない　狆九「まけ惜みを云ふべからず何時でも酔も仕ねへに酔拂ッた眞似をし

て裏たがる癖に　猫六「夫れやァ手前の事だ　新造「ろんな論はどうでも宜しから早くお休みなさいヨーと云ひながらポーメと一ッ脊中を叩かれて猫六は忽ちグニャ〳〵と成り三人別れて眠りに就ぬ、

×××××××××××

月夜烏でお客をかへし情夫に實意を明の鐘、氣に入りたる客なれば羽織かくして袖ひき留てと強て留めもすれ、是に反して氣に入らぬ客は成たけ一刻も早く追出さうとするの此廓の習ひ　娼妓「モシ旦那へ〳〵　モウ六時過ですよ……オヤ〳〵きたないねへ鼻から提燈を出してサ、ァ、此の娼妓は嫌だ〳〵此様な狸見たやうな奴でも金を持て來りやァ旦那だのお客様だのと云ひ無きやならない是を思ふと本當にモウ



はと〳〵嫌になるよ……モシ旦那モウ夜が明ましたよと愚痴を溢しながら揺り起せば、前夜の勞れにグッスリ寐込だ猫六は、赤鰯のやうな眼をヤット開いて　猫六「アヽヽヽヽヽ……オヽ眠い〳〵まだ早いぢやァねへかー　娼妓「早いどころかモウ七時前ですよ　猫六「時計が狂ッて居やァしねへか　娼妓「さうですねへ此樓の時計は大變すゝむ癖があるから三十分や四十分は違ッて居るも知れませんが一時間たァ違ッて居やァしませんよ　猫六「四十分すゝんで居りやァ丸で間違ッて居るんぢやねへか人を馬鹿にした、と猫六は餘り早く起されたのを不服におもッて居る處へ是も猫六の流儀に突き起されたと見へて狆九郎は眼をコスリながら入り來り　狆九「オイ猫的モウ起ねへか　猫六「起てるよモウ一時間も前から

起てるんだ　狆九「さうか然して犬的いどうした　娼妓「アノ洋犬ですか洋犬は樓室にチャーント寐て居ますよ　狆九「ナニ犬と云たって其犬ちやアねえ昨夜一所に來た客よ　娼妓「いやだねー猫だの犬だの狆だのと丸で動物館へでも行たやうだ　狆九「動物館でも博覽會でもマア宜よ彼の人アどうしたの　娼妓「あの人ッて彼でも人の中かねへオホ……　狆九「何を云ッてるんだ本當に彼の人いどうした　娼妓「あのお客はモウとふくの昔しお歸りになりましたよ　猫六「ナニモウ歸ッたとシテ勘定はどうして行た　娼妓「勘定ハ跡の二人から取て呉れと云ッて行れましたよ　狆九「其奴ア困ッたなア　娼妓「夫れから自己は急ぐから人力車を一挺あつらへて呉ろッて綱引に後押でお歸りになりました　猫六「贅澤な事ヲ仕



やアがるなア然して其車代ハ自分で拂樣子だッたの　娼妓「イーエ夫も御一所の勘定になつて居りませう　猫六「酷い事を仕やアがるなア　娼妓「それから何處かで朝飯を食て行くちやならないが金は殘らず後の二人に渡してあるから一寸二圓ばかり立替て置て呉ろッて二圓お持になりました

× × × × × × × × × × × ×

狆九「オヤ〳〵酷い目に逢せやアがッたなア……兎に角どんな勘定になつているか附を持つて來て見て呉と云ふ中に若い者が附を持て來て　若者「お早う御坐いますと挨拶をしながら出す書附を見れば

記

一金九拾錢　娼妓揚代

一金　壹　圓　　藝妓揚代
一金　壹　圓　　同祝儀立替
一金　三　圓　　惣花
一金壹圓七拾五錢　　臺の物
一金壹圓二十五錢　　御酒
一金八拾三錢五厘　　小物代

〆金九圓七十三錢五厘

外に

金壹圓五拾錢　　車代立替
金　貳　圓　　立替

惣〆高金拾三圓廿三錢五厘

右之通り



月　日　　御客様　　塩加野樓店

トあるにゞ流石の氣樂者も膽を潰して　狆九「此奴ァ驚いたなァどうしたら宜からう　猫六「どうしたら宜からうって首を縊りやァ命が無くなるし逃出しやァ直に取つかまるだらうし金を出すより外に仕方も仕やうも無ちやねへか　狆九「金を出すッて手前は其處にイクラ持て居る　猫六「自己ァ何程も持ちやァ居へ手前持てるだらう　狆九「二圓や三圓なら持てるけれど十圓から上ちやァ迚も足ねへ　猫六「夫ぢやァ仕方がねへから自己の同類を引張て行としやう　狆九「自己の同類たァなんだ　猫六「手前も餘ッぽど悟りの惡い男だなァ同類と云ふなァ馬の事サ　狆九「ハヽ、附馬かヤァさうでも

するより外に仕方がねへ、と評議漸く此處に一決して其由を貸座敷へ談ずれば貸座敷にては厄介な奴が舞込で來たと思へど金の無い者に理屈を云って掛合た處が迚も無益な話しと思へば據ころ無く馬をつはて遣事となせり、ソコで狆九郎の寐言に

うか〳〵と飛だ犬めにだまされて
ワンと思案もあさ歸りかな

× × × × × × × × × × × ×

斯て兩人は塩花をふり掛られながら妓樓を立出で附馬と共にブラ〳〵歩みて淺草の奥山まで來れば、此處に軒を並べて多くの楊弓店ありしに、猫六は鼻の下を長くして遠くの方から覗けば、矢場の女は夫と見て　矢場女「一寸御容子の宜方……



お素通りですかヲイト……アラあかんべェをしてサ氣障な奴だよ　猫六「オイ狆公あんな事を云やァがるぜ遣入て素見てやらうぢやねへか　狆九「宜からう〳〵　附馬「困るぢやアありませんか　狆九「イクラでも困るが宜や何も時間を限つて附て來た譯ぢやアあるめへし　附馬「それやァ爾ですが時間の極が無いからッて遲くなりやァ困るぢや有りませんか　猫六「遲くなったッて宜ぢやないか腹が減りやァ飯を食して遣らァ、と附馬の留るをも聞かずにズット遣入て　狆九「姉さん今日は……　矢場女「よふこそサァ此方へ……本當にサァ今日はどうした風の吹廻しでせう此樣な御容子の宜方が見苦しい此の破屋へ御入來で……　狆九「此の破屋へ御入來だラヤーがら　女「餘り貴郎方の御容子が宜から一寸勘平を

氣取た處でサアね　猫六「勘平を氣取ならついでに自腹も切て貰ひ度れ　玄「夫やモウ云ふにや及ぶオホ、、、、彼の若い衆さん……其樣な處に居ないでマア此方へお這入なさいな立て居ても腰をかけてもお直段は同し事ですよ……本當に旦那よく入らッしやッて下さいましたねへ旦那のやうな御容子の宜、方に入らッしやッて頂くと本當に妾しやア夢ぢやないかと思ひますよ　猫六「何を云ッてるンだ……容子が宜と云かと思やア氣障だと云ふし氣障だと云かと思やア容子が宜と云ふし何方がどうだかサッパリ譯が分らない……オイ狆公よく眉毛へ唾をつけねへと油斷がならねへ　狆丸「さうだ〳〵此樣な女は人を馬鹿すかも知ねへ　玄「オヤ〳〵すまないンですよ夫でも感心ですねへ惡いとも思はないで



來て下さつたのは本當に實がありますよ　猫六「ソラ〳〵いよ〳〵大變者だ何にしろお湯を一杯頂戴して御辨茶羅を承はらうか　玄「アラマアあんまり御容子が好のに見とれて櫻湯を忘れて居ました御催促で痛み入ッたんですよオホ、、、、猫六「自己等もお前の御容子があんまり好からツイ見とれて櫻湯の催促が後れたのだ　玄「モウ馬鹿にしちやア嫌ですよ……時に旦那一本お引き遊ばせな……お芳や弓をかけてあげな然して太鼓下が少し曲ッてるから直してお出で……オヤ幸チヤン今日は寄て行ないと聞ないよ……アレ彼處へ吉さんが駈て行たお芳引ぱつてお出よ……ソレ其處にお茶碗があるよ……アラそゝッかしい娘だねへお盃を足へはいてサ……コレ〳〵其樣なに慌てないで靜かに早くお

出なれへ　狆九よくノベッに饒舌るぢやアれへか迎も敵い
さうもねへから兎にかく一本引うよ・　玄イヨ隧長富士の山
はうづき釣しの僥倖あたり幕當の御名人エライ　狆九止し
やアがれお多福の強つく張りの屁茶無垢の立臼阿魔め　玄
アタ旦那ころ口が悪いよ人間の口の悪いのと土瓶の口の欠
たなア始末にオへませんぬへ　猫六さうサ鐵瓶の手づれた
なア直打があるが女の人づれたなア乞食でも貰はねへのよ
附馬モウ宜、加減にして行うぢやアありませんか　猫六よし
〳〵モウ歸らう、と云ひながら狆九郎に何程か茶代を出せよ
と目くばせすれば狆九郎はオット承知と獻頭て　狆九姉さ
んお茶代い何程おけば宜、のだね　玄オヤ〳〵〳〵お思召次
第で宜、のですよ　狆九猫公おぼし召し次第たア何程の事だ



が手前知ッてるか　猫六自己アおぼしめしと云ふ獻を食た
事がねへから直段は知られへ　狆九常談ぢやねへ天保の一
枚も遣たら宜からうか　猫六宜とも〳〵極上等だと云へば
狆的い天保錢一枚を其處へ放り出して　狆九姉さん御厄介
さま又た來るよとズマーシ込で出れば矢場の女は呆れ遣ッ
て後を見送りながら　玄お丹珍め一昨日來やアがれ　猫六
ハックションッ……畜生め

×××××××××××××

天保錢の茶代に汚短珍と吐鳴れし二人の男い噎をしながら
平氣の皮で雷門の傍までノコクリ出で　狆九どうだい少し
腹ペコと來たが彼處の天麩羅屋へでも這入らうか　猫六ヨ
カ〳〵至極贊成だね　附馬どうも困りましたねへモウ宜、加

……滅に……　狆九「お前い能く種々な事を云ふなア飯を食に迄入たッて眞逆お前に割前を出たァ云は無へよ……夫とも立て困るならお前だけ先へ歸り成さい　附馬「デモ御勘定を數かなくッちやァ　狆九「ろれ見ねへ勘定が欲きやァ一年でも二年でも默言て附て來へ、と云れて附馬も詮方なくアッ〳〵愚痴を溢ながら天鉄羅屋へ這入ば　玄「入しやァい　猫六「オイ姉さん天鉄羅三人前に酒一本だ　玄「畏りました　猫六「然して此家ちやァ外に何か出來るのかね　玄「へイお刺身酢の物、碗盛茶碗むし、てり燒き、煮肴其外いろ〳〵出來ます　猫六「其奴ァ强氣だ夫れちやァ茶碗と酒落やうかね　玄「お三人樣……へイ畏りました、其中注文の品も揃へば　猫六「サァ一杯這りねへ　狆九「また酒か酒のおつき合にやァ實に閉口だ



……ムゝ若い衆さん大杯のでグッと引掛たまへ　附馬「ヘイ有がたう御座います　狆九「イヤニ四角張ッてやァがるあァ猫六「オイ狆公今日も居るぜ〳〵　狆九「何が　猫六「何がッてソレ昨日の犬的仲間よ　狆九「ムゝなるほど居る〳〵今日は油斷しちやァ行ぬへぜ　猫六「然がねへオイ昨日のは先方から這ッて來たからッイやられたんだが今日は一番此方から煽動て先方を胡魔化して這らうちやねへか　狆九「止よ蠢もねへ　猫六「大丈夫だよ昨日彼の犬的が云ッた通りに這らかしやァ宜のだ、と狆九郎が留るも聞ずに猫六ゝ隣坐の客に聲をかけ　猫六「日那大層御愉快な御客子樣で……と突然に聲をかけられて其客い滋い顔　客「ハテな君ゝ何處の人ちやかい僕ァ更に見覺へのない人ちやが　猫六「へー今日初めてお目

に驚りましたので　客「さうちやろう何る見た事のない人ぢやと思ふた……然して僕に何か用でもあるのかね　猫六「ナニ別に用のある譯ぢやァありませんが、一寸御愉快の御容子を聞て見ましたので　客「夫は餘計な世話ぢや、僕が此處で自由に酒を飲で居るのぢやから、愉快ぢやらうが不愉快ぢやらうが君が横合から何も嘴を容るには當らんぢやないか、殊に一面識もない者に向て言葉を交へやうチウに、太平樂に胡坐を組たきゝで然も天麩羅などを食ながら言葉をかけるチウは失敬ぢや　猫六「さう理屈詰で出られちゃァ恐れ入りやしたが……　客「イヤ僕ハ決して理屈は云はん只正當な道理を說くのぢや　狆九「ソレ見た事か、夫だから自已が止しねへと云ふンだ……　且那へ此野郎はね一杯飲だ機嫌で何か且那



に失敬な事を申しあげ仕たか知りませんが、マァ今日の處は自已にめんじて何か御勘弁あすッて遣て下さい　客「これは又怪かることぢや……お前は全体何處の何んチウ人ぢやいの狆九「ナニ自已やァ此野郎の友達でして　客「ムゝ成ほどお前は此人の友達ぢやて此人に代はッて謝罪するチウのぢやノ狆九「ナニ茶代を出す譯ぢやァありませんが自已がお詫をしますので　客「誰が茶代を出せチウた人を輕蔑するにも程のあるものぢや馬鹿めが……謝罪チウなァ詫をすることぢや狆九「然からお詫をしましたので　客「詫をするなら詫をするやうに何で僕の前へ來て天憲を下ん……其樣な處に居て物を食ながら詫をするチウな失敬ぢや、と頭に捻ッて來る處から狆九郎は飛でもない奴に引掛ッたと思へど益々先方の火

の手が強いゆえ捗あろ無く其客の前へ行き先方の云ふ通りに頭を下げて詫をすれば　客　さうお前の方で謝罪なら勘辨をせんでも無いが併し僕が折角獨酌で旨く酒を飲んで居るものをお前達が來て何ちや角ちやチウたが爲に酔も醒て仕舞たから此勘定は皆なお前の方で出して貰はにやならんぢや夫が承知なら勘辨しやう、と云ふにぞ二人はアッとばかりに驚きたれど若し是を嫌だと云はゝ此上どんな理窟を云つて何樣な目に逢も知れぬと飛が聽病風に吹き廻されて云ふがまに〳〵承知すれば其客人ハ〆子の兎と大喜あび手土產までも十分に調へ勘定〆て一圓五十錢餘みな兩人にナスヲ附て悠々として立歸れば跡に殘りし猫六ハ由なき事をしてけりと今更悔るに火事後のポンプ何の役にも立ざるべし



## ◎痴話喧嘩

エ、惜氣は女房の慎むところ痴氣は亭主の苦しむ處とか申しまして、燒餅も一寸コンガリと來る奴ハ却ッて愛嬌があつて宜いものですが、餘り眞黑氣に燒れるのは誠に手も附られないものでして　主人「お時や、私しは是から一寸出て來から、着物を出してお呉れ　細君「ハイ……今日ハ何處へ被入やいます、此暑いのに能く毎日お外出になりますねへ　主人「大抵なら私しも自宅に居度のだが、用があれば仕方がない、日中になると又暑くなるから、朝の冷しい中に一走り行て來ませうよ　細君「御苦勞樣なれへ……然してお召物は矢張り昨日の通に致しませうか　主人「イヤ今日は上布にでもして貰ひませ

う、昨日い單物を着て行たものだから、暑くて〳〵實に困ッた　細君、夫れでいお召物は上布で、然してお羽織い……　主人「さうさね、何せ夏の羽織は壓んで車の端へ置くばかりだが、併し上布の帷子に數寄屋でもあるまいから、今日は紹の方にして貰らはふかね　細君「大層おめかしで御座いますね、主人「ナニ別に粧飾と云ふ譯でもないが、人樣の家へ行くのに、餘まり汗染た物を着て行つては却ッて失禮になるからす　細君「さうで御坐いませうよ。池上の温泉で一日お畫寐を成さるのにい、成たけ粧飾て入らつッしやらないと、人樣に失禮で御坐いませうからねへ　主人「先刻にから默、止て聞いて居れば、お前は大層めかすだの池上の温泉で畫寐をするだのと、妙な事ばかり云ッて居るが、私しが何時温泉へ行つたね　細君「お



とぼけ成さいますなよ、イクラ其人がお隠しになつても、妾くしはチヤーンと存じて居りますよ　主人「存じて居るなら存じて居るで宜しが。お前からして其樣な馬鹿な事を云ふやうでい、内家の者の示しが附なくて困るちや無いか　細君「示しが附なくて困るようには誰が成さるのでは御坐いますまいか、肝心な御主人が藝者を伴てお成さるのでは御坐いませんか、温泉遊びを成されて、夫で内家の示しが附きやう筈がないでは御坐いませんか　主人「ナニ藝者を伴て温泉遊び……飛でもない事を云ッたものだ全体誰が其樣な事を云ッたね……怪からん事を云ッたものだ……　サア誰が其樣な馬鹿な事を云ッたか聞ませう　細君「餘りさう口奇麗な事を被仰いますな、藏を失いて蛇を出すやうな事があつてい却へッて其人の

お爲になりませんから　主人「イヤ二さうでありません、縱ひ蛇が出やうと反虫が出やうと身に覺への無い其樣な馬鹿な事を觸れ散かすやうな者があつては第一自家の爲に成りません……サア誰が其樣な事を云ッたか云ッて御覺、能度私しが詮議をして見せる　細君「夫でゝ申しませう、昨日其人のお供をして行た清吉がさう申しました　主人「ナニ彼の清吉が……どうも是は怪からん事を云ふ……宜しい今此處へ清吉を呼んで聞て見ませう　細君「夫はいけません　主人「ナゼね細君ナゼッて其人、昨日も妾しが餘ぽど氣をねらして、斯したり騙したりして、凡そ一時間も掛ッて聞ても、且那いえの近江屋さんへ入らッしやッて、夫から麹町の和泉万まで入らッしやッて、此處でもう宜から自家へ歸れと仰しやッたから路



まましると計り云ッて居て、何しても本音を吹ないのを、妾しが勇樂を二十錢遣て、ヤットの事で云はした位で御座いますものを、其人が此處へお呼びになつて、コレ清吉自己が何時蔵者を連て遊びに往た、サア夫を云ッて見ろと仰しやッたから、清吉が叱られると思ふから、何が其樣な事を申しますものか、　主人「イヤ二さうでありません、今から其樣な盛言を吐くやうなでは自家の爲にも惡し、彼の身の爲にも成りません……清吉や……コレ清吉と呼ぶと清吉は　清吉「ソラ又た始餅喧嘩が初まつた　主人「何を云ッてる……　清吉「ナニ此方の事で……何か御用で御坐いますか　主人「用があるから呼たのだ、マア其處へ坐れ　清吉「ヘイ　主人「手前い昨日自家へ歸ッて内儀さんに何を云ッた　清吉「私しやア何にも云やア

致しません　主人、何が云はないものか昨日自家へ帰って旦那は今日藝者と同乗で温泉へ行ったと云ったさうだが、ナセ其様な虚言をつく　清吉、イヽヱ其様な事い云やァ致しません　細吉、ソレ夫だからお前は虚言吐きだと云ふのだよ、虚言を吐くとお閻魔様に舌を抜れるよ、昨日妾しの前で慥にさう云ッたちやないか　清吉、夫やァ内儀さんが何でもサウ云へ、旦那と藝者と同乗で温泉へ往たと云へ、サウ云へば二十錢遣ると仰しやるものですから、さう云やァ二十錢戴けると思ッて内儀さんの仰しやる通りにさう申しました　主人、イクラ内儀さんがさう云へと云ッたのらとて、其様な馬鹿な事を云ッちやァ困るぢやないか、又たお時もお時だ、自分で宜加減な事を作って夫れをさう云へば二十錢遣の三十錢遣のと、子供を欺して其通りに云はして夫を騙様に愚圖〳〵云ふとは實に怪ら



ん事ぢやないか……　嫉妬は婦人の慣むべき處、お前のやうに爾下らない嫉妬を焼ては仕方がない、と云ふ處へ奥から藝居さんが出て來て　藝居、悴やモウ宜、加減にしな、其様にイタラ小言を云ッても無益だから　主人、へー夫はまた何故で御坐います　藝居、何故だッてお時は元話痴喧嘩(千葉縣下)から來たのぢやないか、

## ○片言

母、源坊や　源、アヽー　母、お前れへ　源、アヽー　母、嫌な遊事だねへ……お前井の上さん處へ行てねへ　源、ゑのうい。さん處へ行のかい　母、又ゑのういさんと云ふよ、井の上さんだ

ようー　亜然からゑのういるんと云ッてるちやァないか　母
アレあれだ、ゐ、の、う、ゑ、と云つて御覽　亜ゑ、の、う、い　母困るね
へ　ゐ、の、う、ゑ、だよう　亜ゑ、の、う、い　母ゐの　亜ゑの　母
ゐだよう　亜然からゑと云つてるちやァないか　母ゐのう
ゑ　亜ゑのうゐ　母「ア、自劣度ねへお前のやうに間違ッた
事を云ふ者ァないよ一寸其處のてッくり(德利)取てお呉れ

## ○一回小説

イヤ是は呑氣樣御主人宜く處へ御座ッた、君い錄ッぱど耳果
報に富で居る人だ、今幸ひ落し話しが出來たから一寸聽き給
へ但し欠伸は禁物だよ、エヽト先斯云ふ態向で、エヘン天窓に
載いた蜻蛉翁は飛ん處で國粹保存の落を取る手に搬へた鍋



蝙傘はひよんな處で經濟博士を吃驚させ草鞋も手造り著物
も手織織の當ッた千草の股引に太閤時代の小倉帶邪見に色
氣なく尻を端折た壞梅は、どんな自慢鏡に寫しても間違ふか
なき田舍親父年の頃は六十二三分別盛りは疾に過て今い早
や孫子の行末を樂むばかり、娘はどうした壯健で居るか無事
に奉公して居るかと、顏見るまでは氣も落附ず、勝手口へ來て
突然に　親父「お、松ー、松公やァ、ムー御挨拶をまだ仕ねへだ、へ
ー今日は好お天氣さまで、松公ーお松やァ居ねへか奥に居た
下女のお松い、泣顏見せしと涙を拭き取り　松「誰だァ人の事
を松公だのお松だのチウなァ、と何氣なく出て來て見ればお
ソヤ！突ッ立て居る親父の太郎兵衛　松「あれよ誰だァと思
ッたら阿父樣かァ　太「阿父樣よ　松「何で來しッたァだ　太

あんでチウてハァ汝しに急な用が出來たァから來たァ、マァ緩くら話すべェから湯なと一杯呉れッせへと腰をかタッ、不圖お松の顔を見て　ハテ、あれよお松ー汝しやァ泣てるな、何したァ云はねへ事ちやァ無かんべェ、汝しやァ眞妙院様の虫封じで何でもハァ癒るだァから率公に出るなら病癒れへの無へやうに悪い虫を皆な封じて貰ッたら宜かんべェチウたのに何にお髪頭豊様の身体中搗でコクッて置たァから大丈夫だの腹の痛へ時にやァ冷ッけへ水を一杯呑やァ直に癒るだのチウて、俺がの云ふ事を聞ねへもんだから夫見さッせや　ハテ阿父様ァ何にを云はッしやるだァは、私いはァ腹が痛へのち、やァありましねへ、主家のお嬢さんが可愛想でなんねへから、



夫でハァ涙が出るだァ　ハテお嬢さんが可哀想だァチウてお嬢さんが何にを仕さしッたかァ　ハテ「阿父様は知らッしやるめへけんど、主家の御新造さんはハァ元何處だかの藝者だァとか女郎だァチウ事んだが旦那様が餘まりべェロッヤだァもんだから、前の御新造さんをハァ追ッ出して今の藝者だァか女郎だかを引張ッて來さしッたァだ、夫も宜けんど旦那様が居さッしやらねへと何だ艱だァと無理な事べェ云ッてお嬢さんを苛酷だァから可哀想にお嬢さんは毎日〳〵泣てべェ居るだァのにお負に昨日から以來やァお飯せへ碌に食はせねへだ、なんぼ糟ッ子だァチウても飯を食はは無きやァおッ死ぬべェちやねへか、夫だァから今も私はハァ大い握飯を拵へて密と持行てあげたらお嬢さんは有がてへチウて手を

合して拜まッしやるだァほんにハァ可哀想だと思ふと涙がツン出で成りましねへと談話の荒增を聞た太郎兵衛親父は、垂る水ッ、鼻汁を拳固で摩りながら　太「さうかヨウ、其樣な事たァ俺ァ知んねへで來ただァが、是よお松ー、汝しもうひやァ十八だァから宜、嫁入の日があつたら早くおッ片附て、爲さまにもハァ安心させて遣んべエと思ッて居たァだが、此間樽作どんの來て云はッしやるにやァ彼の清兵衛どん家の兄ァが何でもハァ汝しが執心だァチウだ、夫でハァ俺がも考へて見たァだがノウ彼家なら大した財產家チウでも無かんべエけんど、俺がの娘を呉るにやノ不足でも無かんべエから夫でハァ迎へに來たゞァが丁度宜幸ひだァ其樣な分んねへ背たらしい事をするやうな主人なら、早くハァ暇を貰ッて俺がと



一緒に歸ッたが宜い　太「何に私やァ歸りましねへ　太「何故歸らねへだァ　太「何故だァチウて私はハァ歸ッて見さッせへ主家のお嬢さんがおッ死で仕舞ッしやるだァものト道人は頗る得意顏で讀で居るにも拘はらず呑氣樓主人は大きなくさめをして「ヒヤクション」

## ◎自轉車と機轉者

或二人の官員さんが四方山の話しの際談偶々自轉車流行の事に及び、近頃自轉車が大分流行して、到る處に若い者や小僧などが頻にガチヤ〳〵と遣ちよる、成程これは宜い事で或人の話しに、自轉車に乘事を熟するチウと汽車より疾いげな、尤もさう成るには餘程乘馴て後の事ちやけれど、何に致せ自

轉者い飯を食ふでも無けらにや給金も入らず、お餞に身躰の運動にもなるチウのちやから是が所謂一擧兩全ちや先づ馬車に乗れば馬は勿論馭者も入れば馬丁も無けられやならず腕車にしたとても矢張り車夫だけは雇んけりやならんし然して其奴等が皆な飯を食た上に給金を取るのちやから溜らないちやから僕も今後い生た人間を使ふ事を止て自轉車にしやうと思ふ、さうすれば何の位經濟になるか知れんア、併し自轉車も上等になると隨分高價なもので、百圓乃至二百圓もするさうちやが、夫れ迚も素より買ふとき丈の事で毎月夫はどづい入る譯でも無いから、どうしても馬車人力車よりも自轉車の方が經濟ちや、と頻に自轉車の功用と經濟の事を論むるを聞て一人の官員さんが、如何樣遲速を云ふたら何れがど



うだやら、夫りや試驗て見んけりや分らんけれど併し經濟の點から行と自轉車よりか未だズット經濟なものがあると云へば主人公い腦を潰してハフれ僕も隨分經濟ぶれ拔りのないかちやが、自轉車の右に出ものがあるとは堅とも知らんかの、夫は一躰何ちやどう云ふもんちやと問ひ詰れば、其人は餘程の秘密らしく決して他言するな確に人に語るなと堅く約束しつゝ耳に口を寄せ、ナニ外でもないお尻を端折て歩行のちや

## ◎某候補者の失敗を悔む

今度道人の知己が候補者に打て出て物の業事に失敗を取たから斯う云ふ悔みの手紙を遣る積りだが如何だらう一寸聞

て呉れ給へ。

政海波荒く民藩も亦た穏かならず意氣張づくより折角大船に乗た心持で安心して居る我々蛆虫同様の人間も若しや此船をヒヤツヤ山の素徹邊へ漕あげられはせぬかと實は除計な取越苦勞を致居候の時節貴君幸ひに脳病痔疾梅毒インフルエンザにも御掛りなく高利貸より素敵滅法界眼の玉の飛出すやうな金を借込でヤツトコサと大法螺を御吹御事し成され候由兎に角命あつての物種と申せば是も亦た目出度の一部分かと存じ奉り候扨て此度議員慾出代りの儲に付き貴君も其頭數に加はらんとの大望を懇ひ立れ候より平生いやに横柄にイヤに高慢にして商人を救済と唱り官吏を卑屈と罵り天上天下我獨り尊き人間なりと云はぬ計りの面



撞つを爲しツヽ有れども拘らず登に其救済卑屈の人々に向つて米搗バッタの年始に獻るかの如くヒヨコ〳〵と天窓を下げて頼み廻り或れ交誼の爲とか懇親の爲とか稱してナケ無しの財布を拂ひて御馳走を爲し或ひは一組五人に付き一日二圓五十錢ツヽと云ふゴロツキ壯士を雇ひ込でイザ腕力と云ふときの後ろ楯と爲す等其の御心づかひ御心配の段元々國家の爲めか名譽の爲めか但しは年俸八百圓を貪らんが爲めかれ存ぜず候得共中々御骨折の程御察し申しあげ候然る處生憎貴君より今一度勾配の早い利口な者有之候て実然ウソトコドッコイとれいのさと飛出し殊に先方には充分運動費も之れあり候より意々今日が天下分目の一六勝負と云ふ一段に成ると貴君はもろくるコロ〳〵と團子の如

くに投り出されたト云ふ譯でもあるまいが何に致せ先方に勝利を得られて貴君はポカ〳〵と御成り成され折角の骨折も草臥儲けと相成候段誠に早何とも難ども申し樣のない程御氣の毒他人の我々さへ涙が引込んで水ッ鼻が出る位迄御當人に取ては猶更御殘念若しも命の替玉があるならば舌を食ひ切て死んで仕舞た方が増ならんとの思し召も可有之と察ながら御察し申上候併し乍らどうせ今度も永くは續く間敷いつれ新規巻直しの時も之あるべければ其節い又々〳〵とお辭儀を成さるべく若し又その時失敗を取れば又其次又々その次と段々〳〵失敗を取て居る中にい一文なしの空穴なるか夫とも命が亡なるか何れにか片附に相違なければ左程御落膽にも及ぶ間じく只々金を惜で運動費に惜支へ



のなきやう御心掛の程專要かと存じ奉る長右衛門か御悔み御見舞まで如此に御坐候再追

と云ふのだが彼奴が之を見たら定めし笑ふだらうと思ふね

「ナニ笑ふ處ぢやアない却て腹れ面をするだらう」ナセネ「ナモ是はヒヤカシの文だから

## ○大典句

此頃或る友人の家へ訪問て四方山の話しの砌彼の銀嬢の大典にハ何か面白い催ほしでもあつたかと聞しに友人い最も得意顔よくこそ尊ねて呉たと云はない計の容子にて「イヤ中々面黒い催ほしをした酒を飲むだの三味線を彈だのと其樣な野暮な振舞はせずにスット謹慎慎重と云ふので狂句會と

出掛た、幸ひ此處に其時出來た句があるから一寸お目に掛や
う先づ一花君のが「洋白は及ばず銀婚式の美挙」す、餘り上出來
でないが彼の男の力にしてはマア〳〵此位なら上として
貰のす、夫から好笑君のが「宇内に輝く銀婚の御盛典」す、狂句と
云ふものは斯うゴツ〳〵遣るものではないが、併し是もマア
止を得ず我慢するとして、夫から半狂君のが「聖壽万歳献納に
銀の盃」す、是も誠に早と云ひ度い位のマ印で、只銀の盃だけで
い強ち銀婚式には限らないやうだが、併し即吟だから少しい
大目に見て置て遣るとして夫れから有癖君のが「銀婚の祝事
餞道まで直下」す、是もマア普通の出來だね、其他まだ餘程ある
が何れを見ても山家育ち然たる句面さ、アヽ、ヽ、其處で僕
は皆なお銀婚〳〵と云ふから同じやうに銀の字を使ッては



氣が利かないと思ッて一寸金婚と逃たね、初心の中には斯う
云ふ處に氣の付ないもので「金婚も銀はあれおしと民の慾」す、
ね斯う行けば銀婚だの御盛典だのと態々ことわらないでも、
スッパリ其の意味を含んで居ませうがね、是は又た新の道で
少しは苦しまねば、斯う飛離れる事が出來ない、ね〳〵君さうち
やないか、と何だか他人の句へは一々ケチを附て自分の句だ
けが大層氣に入て居る樣子に流石の道人も挨拶に困ッて「成
程それは御句上樣」

## ○昔噺忍ぶ草

是は道人が秘藏する珍書の中の一ツなり、何が故に珍書
として藏するかと云ふに、是れ弘化二年の春、二代目立川

馬の廿三回忌を營みしとき其同業者より寄りて梓に上せたる天明ぶりの落語にして然も賣買を禁じ僅かに百部を限りて印刷せし由なれば即ち之を珍書とするも不可なからん、而して今あれを此處に牛蒡抜として擂ざ出せしは、强ち道人が骨咨みの横着心には非ず、唯、故きを温ねて新らしきを知るの御參考に供せんが爲めなり、但し原文の僅筆を加へず

○子の日

正月初子は官女が鋏の袴で小松を引と云ふが江戸にはあるめへ、やす兩國と日本橋辺「うろを」何うそなものか檜物町と鋏橋では正月二日の初音に老松をひきやす

○節用

岸澤式佐の事を節用男といひやすが其樣なに覺えの宜い人で御坐りますか「ナニ、夫には譯のある事とさ」なぜ「大文字小文字をひくではないか

○くだもの

蛸にゝ足が八本でおざり升　烏賊にもとんふ昔し咄しゝどうも宜いあゝ手がるくは出來ねへ、テ「ナニ今でも出來やす」どうだへ「まづ甲州でゝ菓物がたいさうな金さ」なるほど

○俳諧

宗匠アノ貴風と云ふ野人にも困ります「古池や蛙のみ込む水の音と覺えて居ますぜ三ッ子も知つて居る翁の蛙飛込むを呑み込むとはどう云ふ譯だなう」アノ人ゝ蛙のみ込むと云ふ筈さ「あぜ「ハテ目くら蛇だもの

○蕎麥

源氏茶漬がはやりますから平家蕎麥と云ふを思ひつきやした先づきれいに盛たのが清盛けぶりの出るのがあつ盛たい羅もどざります同じおかはりがとも盛たんと有るのが宗盛さ「おれなら其の蕎麥をみんな喰て錢を一せん置いて出やす「なぜへ「平家は貧な一もんでいないか

○發句

ふとん着て寐たる姿や東山と云ふが其樣な大きな布團もね へものだ「ナニありやす一國ですはうと云ふがある

○富士

兩親の忌日には富士の掛物をかけて供物を備へて拜をいたします「是はかんしんだ親の恩は富士より高いと云ふ心う「イ



ヽエ「シテ何だ〳〵「ハイ私を一夜の中にこしらへました

○狂歌

吉原を日の出ぬうちに急ぐのいきのふ迎ひに來しみいら取と云ふ狂歌がありやすが櫻でみいら取といふ有がてへ「左樣さいつかみいらに成やつさ內へ歸つて御覽じろ女房が眞黑に成て腹を立やす

○龜

向ふ島の土手の下で龜が甲をほしてよい心持ゆゑ首を入てぐつと一寐入じて居た處へ鷲が來て龜の背中へ乘りあたりを見ると龜が目をさまし首を出して「一向宗が見たらほしがるだろう

○王子

初午に王子に行きやしたが菜の花の盛りで奇麗な事さ夫にをかしい事がありやした追分の王子道をば權助がおうし道と讀みやした夫い讀むのが尤もだ菜の花の盛りだから「ナセエ」ハテ一面に口なしちやァねへか

○竹澤

モシ竹澤い獨樂の名人でおざります江戸ばかりちやァねへ京大坂長崎まで廻ッたが皆な大當りだ外の獨樂まいしい皆な竹澤の胯を潜ります「さうかへかんしんだねへ

○五段目

五段目の勘平が廿九日の夜だから眞の闇のおもひ入れで猪をうつのがどうも分らねへ猪が挑灯でも持ては居めへし何を目當にするのか餘まりうそらしい「夫たから勘平が鐵砲を



もつて居るい

○字治川

四ツの事をせんぼうでは何と云ひます「ろれい佐々木上「ホヽニ佐々木でおもひ出した字治川の先陣い梶原の馬がする墨かね「さうさ生月が佐々木上「女房が「オヤむかしは大男が四人りあつたかね

○横綱

アノちいさな相撲取は何と云ふのだ「しらねへ上「ハヽアあれが横綱か

○金岡

淺草の金岡の馬は夜な〳〵草を喰ひに出たと云ふが今でも出るかの「どうして今ちやァ附き馬に道草を喰せるよせへ骨

が折れるものを

○奉納

金杉の毘沙門様へ百両奉納しやうと云ッて願を掛たらかなひましたが十両も出來ねへどうしたものだらう「夫はゑんぎの金を納めなせへ「ろれちやア罰があたるだらう「ナニお喜びだ「なぜへ「ハテむかでだから

○からす

烏に反甫の孝ありと云つて名烏さうこで日の出にカア〳〵と啼やすろれほどな名烏が月夜には時でもねへ時分に啼くは馬鹿なものだね「あれは啼様が違ひます「なぜへ「ハテあほう〳〵といひます

○生月



生月の駕籠をかつぐにい大の男が四てんで手がはりとも八人でかきます「駕籠を四てんとはおもひ月だな

○角力

若者等がよつて相撲をとり居る處へ高野聖來りてとりけるに勝者なかりけるゆゑ皆〳〵おろれて相撲のわざを教へたまへと云ふに僧こまりて全く角力に妙を得たるにあらず聊か爲す事ありて、勝たりと云ふに人々ゆるさず是非をしへ給へと云ふに僧外の事でいなし立合の時土砂を振かけしと云へり

○祇園

六月十四日には祇園様のお祭で神輿かきが大坂から來ます四條の橋の上で七草をふみやすが見事なものさ江戸にいあ

るめ（馬鹿アいひぬ（江戸の天王様をかつぐにい御造酒のうへで亂ぴやうしをふみやす

○川柳

「吉かう聞きぬ（今流行の川柳點に年號はかさいのせあァよく覺えとは宜ちやァぬ（さうサよくふんべつをすれべする程いふぬ

○初松魚

釋尊もあれ時鳥ろれ松魚と天地へ指をさして御坐るから初松魚い格別なものさ夫だから天にも地にもといふ此拾をまなて喰ひやすばかを云ひぬ（跡でどうする氣だ（ハテ松魚い烏帽子魚といふからかりぎぬで居やす

○島蛮



大きな花瓶を貰ッたから今夜の婚禮の島蛮はこれですませます（ナセ（ハテとうらいのかめだから

○淨瑠璃

淨瑠璃は義太夫ほどふしの細なものはないぬ（ハハァろこで竹本豊竹と云ひますか

○開帳

モシ向ふ島の開帳へきらずを五十俵小豆のかすを五十俵合せて百俵納めやうとおもひます（ナセ（ハテ牛のごぜんだから

○目貫

モシ若旦那うけておくんなせ（北國のしろもの（時代だが指のまたと腕とろして股と三所（入れぼくろをさせました

遊女の三所のぼりものはありがてへ　腰居「なに遊女のみどころだへ夫は宜いわしが買ひませう」代い何ほど「ハイつけ廻しだから二百疋で御坐ります「安いもの併し二世で御坐らう「イヽエ命とぼりました

○祝儀

島臺の上で相生の松が鶴を見て　松「オイ〳〵お鶴さんいつみても美しいぜ脊はすらりと高し色い眞白赤いきれがよく似合ます舞子といふものはいつ迄も若いものだ　つる「オヤおなぶりでない此頃い乗おもりで子にばかりかまけて意愚智いねへよ　松「ほんに子供衆はどうしあさつた　つる「乗立をしてみんな獨り行きをします　松「そをれ御安堵だモシわたしらの樣に節癖だづちやアわけいありません　つる「オヤ



お前こそ幾歳になつても若縁いろけが少しもかはらなはら、ないねへ　松「それは常盤木で色はさめませんもつと根固へお寄りな　つる「アレおよしなお竹さんが見るとわるいよ千どせの松に千代の竹とおないどしの御夫婦おうらやましいね　松「なにさ竹の子は出來る雪にあたつて寒癖がついていくちやアねへはな　つる「オヤ梅さんに云う付けますよ　松「オイ梅兄イそんなにすねずに枝ぶりを直しや手前もすいのみちやアねへか

◎おどけ文

○少女の義太夫を聞て感あり

敬ふれば猿も芝居を爲し、習へば犬も手躍を爲す、然れば萬物

の靈たる人間が如何なる技藝を演じたりとて、決して感心すべきに非ず、と云つて見れば、彼の角兵衛獅子がイクラ身輕に引繰返るとも、綱渡りが何ほど旨く絹糸を歩むとも夫れい當然の事と理屈詰から云へば、夫も一理なきにはあらねども、然らば斯云ふ其人に向ッて角兵衛の真似を演て見よ、綱渡りの真似をして見よと云へバ、如何に万物の靈なりとて何うして爾口の先で云ふやうな譯に行くものにあらず、故に此の如く小理屈を吐者を稱して畑の中の網打と云ひ、又た疊の上の水練とも云ふ尤も人は生れながらにして之れを知る者にあらずとやらにて、何事にても學ばざれば出來得るものにハあらざれども、併し學ぶにしても人に依つて又た器用と不器用あり、又た上手と下手もあるゆゑ、何うしてる上手ハ上手と褒め、



下手は下手と笑ふより外に仕方なし、ソコで又藝の上手下手や器用不器用は扨置て、凡そ世の中に藝人ほど苦辛して我が家業を勉強するものハあらざるべし、例へば講談師の如き或ひは落語家の如き、或ひは義太夫語りの如き或ひハ手曲師の如き、先づ寄席へ出て前座を勤めるより中席を打までに昇等し、夫れより愈々心を打つに至るまでは中々容易な辛苦にはあらず然れば其辛苦に辛苦を重ねさへすれバッヤッ心打までに達すべき筈なれども、其處が即ち人間の器用と不器用にて器用な者は左程に辛苦せずとも心打となる事を得れども不器用な者は天窓が兀ても猶ほ中席にさへ達せざる者あり、誠に早やお氣文字樣と予すべし、時に或時一友人に誘はれて某義太夫の寄席に至りしに其心打ハ竹本何之助と云へり、

道人は未だ其何之助の藝道に於ける、巧か拙かを知らざれども、兎に斯心打なれは下手の遣氣ひは無かるべしと来を、楽しみに段々と聞終り、イザ是にて今晩い刻出されると云ふ間際に望みキリ〳〵ッと簾を揚げて現はれたるは年齢僅かに十一二歳の小女子なり、ソコで樂屋の口上を聞けば是が即はち竹本何之助なる由を傳へり、道人登に其意外に驚ろかざらんや其時實の處ろは腹の中に以爲らく、此の乳臭兒何事をか喃づり得る歟と、然るに能く〳〵聞て見れば何うして何うして中々感心旨いもの〳〵殊に其の音律抑揚の如き或ひは悲泣笑語の如き皆是れ彼の乳臭兒の咽喉より發するに似ず、之れを面前にて聞けばこそ小女子と蔑視する樣なものゝ若も之れ物の蔭にて聞しならば或ひは老練者と鑑定する



は勿論なるべし、道人は元來義太夫を好むの癖あるがゆゑに、頻りに其熟練を賞して靜聽すれば、友人は己が此處に誘ふて歡心の媒を爲したるを鼻にかけ、我物顔に賴まれもせぬ添口上をして曰く、彼は本年僅かに十二歳素より本人の天性にも依るべけれども、一は母、親某の薫陶によつて此の結果を顯はせりと道人曰く天性にもせよ薫陶にもせよ、斯くの如き一小女子でさへ心を打ものを御同樣に斯く長大の身を持ちながら文壇の心を打つは、果して何れの時にある歟と、友人顧りみて他を云ふ

## ○雪の說

雪の物たる其色素敵に白くして其質たる滅法界に冷たく且

の火に煽れば直に融解て水となるものなり而して其色の白く其質の冷たく且つ火に煽れば直に融解て水となる事は飴賣の尻につき纏ふ鼻垂小僧と雖もよく之を知れり然れども其然る所以即はち何云ふ譯で雪が降かと云ふ理合に至ッては之を知る者少なきゆゑ道人が一寸手短かに雪の講釋をしてお聽に達せん諸君よろしく謹聽〳〵せらるべし扨て毎年冬になると此の天地の中は何處でも彼處でも皆一体に寒くなる氣候につれて溝の水や手洗鉢の水が凝る如く空にある天の河も亦た固ア く凝るなりソコで雨を降せる本家本元の天の河が凝つて仕舞ては此人間世界には水が無くなるゆゑ其處が殺す神ありや助ける神天道は人を殺さずと云ふ諺ざの通り天の河の近邊にも慈悲の深い人が居てア、斯ぢうも



水が凝つては定めし人間世界で困るだらうと云ふ處から慈々く大きな鮑を製造て彼の天の河の氷をガッ〳〵〳〵と削つて落すのが即はち雪なりとは道人が新發明の駄理說なれば トット當にいならざれど併し其駄理說は兎も角も雪と云ふ奴は種々雜多の物の引合に出される白物でいナイ代物にて土百姓は曰くクレハア作兵衛ぢんや今年ア大層雪が降たァから屹度豐年だんべェと是れ寒中に澤山雪が降れば土の中に潜り込で居る毒虫が悉く死して五穀野菜共に上作との心持を云ふなり又た御隱居さんは曰く雪は太平の前觸ちやと是れ寒中にドッサリ雪が降れば其年の氣候が規則通りに行て虎列刺病などの惡疫が少ないとの喜びを述るなり其他毛唐人は雪を以て瑞祥と爲し赤髭親父は雪を指して其集

と稱し又た山邊の赤人は田子の浦に飛出して富士の高根に雪は降つゝと詠み光孝天皇は我衣手に雪は降つゝと宜まひ其角は我物と思へば輕し傘の雪と云ひ骨皮道人は我物とおもへど重し下駄の土と云ひオット是は雪の緣がないが昔し安藤何某は雪の日やあれも人の子樽ひろひと云ひ又た西鳥と云ふ俳諧師の女房は我子なら供には伴じ夜の雪と云ひ又さ落語家の前坐は初雪や大坊主小坊主が一所に轉んで頭の足跡飄箪かなと云ひ又た葉唄には雪は巴に降り頻ると云ひ又た菅原天神記には似ても似附ぬ雪と墨とあり又た唐人の屈痴固い詩には香爐峰の雪は簾を揭げて看るとあり猫は又た昔し車亂と云ふ人は雪を燈花にして書物を讀しが爲に學者の節判を取り孟宗は雪の中から竹の子をキザク出し



孝子の名を遺し赤穗の義士は雪に乘じて吉良の首をチョッ切り飯沼勝五郎は箱根の雪によつて滝口上野を討取り道樂息子は朝の雪を口實として居續けを極こみ娼妓は雪降を俟て俳として可愛い男を引きとめ其外また別嬪の色白きを雪の肌と云ひ砂糖の上等を雪白と云ひ貞婦に深雪あり俳諧師に嵐雪あり齒磨に雪の梅あり干菓子に花吹雪あり昆布に薄雪あり豆腐に笹の雪あり紋の名に雪輪あり臭い處に雪隱ありイヤ雪隱まで引合に出せばモウ是で雪どまりなるが何に致せ雪の効能たる大零斯の如し故に道人の人並はづれて雪を好むこと小狗と一般實ては雷の三里までと思へど何故か此の兩三年の雪降ず依て人々の心配し本年も又々饑饉の崩しがありはせぬか虎列刺病が流行せねば宜いかとの取越苦勞

ん強ち無理にあらず然れども東京に雪が降らぬとて之を以て全國の定木とするハチト杓子的を免かれず且つ虎的の流行も何だか當にハならざれど併し饑饉の萌しがあるかも知れぬ虎列刺病が流行するかも知れぬと思ひ其積りで常に覺悟を極てその準備さへ怠たらざれば何方へドッ轉んでも無益ハなかるべし

## ○寒詣り

道人編輯のお役を濟して宅に歸る、概ね午後七時頃、細君晩酌の用意をして已に待つ、見來れば野代の膳に一二種の粗肴を添たり、曰く、野郎相當なる出舌目の剝身、曰く身上相當なる奴子豆腐、道人例の手酌を以て且ッ飲み且ッ食ひ滿くにして意



間の窮屈を怠るゝの際、門前頻りに聞ゆる鈴の聲、一往一來其摩チリン〳〵〳〵、恰も至急の大變事ありて號外を配達するものゝ如し、道人怪しんで曰く彼のチリン〳〵ハ果して是れ何等のチリン〳〵ぞや、近來ハ世の中泰平無事號外を發するやうの必要ハ更に之れなきものを、語いまだ畢らず細君クッ〳〵と笑ッて曰く、貞人はお職掌柄にも似合す何を迂濶な事を被仰る、彼れハ即ち例年の寒詣りなりと、道人ハタと膝を打て曰くナールほど違へれ、今は即ち寒中なる事我已にあるを知れり成ほど彼れは寒詣りに違ひないイヤさう判然と分ッて見れば是又た一ッの理屈種と爲さいるを得ず、夫れ寒詣りてふものハ寒三十日の間毎夜寒さを忍びて已れが日頃信ずる處の神社佛閣へ詣ずるなり、昔しは丸の裸体になな

つてザブ〳〵水を浴び身体を清めて駈行くを例と爲したを
ど眞裸体い現時法律の禁ずる所也を概ね金巾のシャツ一枚
を着す、試みに思へ人は襦袢に胴着に紐入二枚を重ね着し其
上へ普通の羽織と書生羽織とを着し猶寒しとてフランネル
のシャツに股引を穿き風呂敷大の襟巻をクル〳〵と首筋に
巻附ながら巨燵に潜り込んで居る有様あるに如何に壯健な
身体とは云へ寒中に薄ッ片羅なるシャツ一枚とは隨分驚く
べき話しなり況んや風霜雨雪の嚴夜に於てをや、而して斯く
忍び難き苦を忍び爲し難きの事を爲し、其堪む所は如何なる
事かと云ふに只技術の上達を祈るのみ是を以て寒詣りを爲
す者多くは職人なり或人笑ッて曰く寒中裸体参りをして神
若し御意に叶ふ者、どすれば暑中に布子を着安栗を背負て嚴



ゝるも神亦喜ぶべし、然るに寒詣りありて暑詣りのなきは如
何と成ほど理屈上から是を云へば或ひは然らん、素より寒詣
りは野蠻の遺風にして嚴者の爲すべきものに非ず然れども
斯く辛苦艱難してまでも我技術の上達を志すに至つては實
に感ずるに餘りあるなり去りながら之を爲す者に於ても只
寒詣りさへすれば其日暮しの貧的も俄に銀行の頭取となり
叩き大工の熊さんも自然に棟梁棟となれると思つて居ては
大變な間違ひなり故に寒詣りを爲す位の熱心家ならば猶平
生に在ても人並勝れて勉強する事肝要なるべし、然らざれば
折角の寒詣りも遂に苦しみ損となり震へ損とならんのみ

◎俳句の口真似

近來は俳句とか發句とか云ふものが大層流行して到る處猫も杓子も古池やの假聲を遣ひ切れ字が何であらうがゝや哉がどうであらうが題貫り季節ヌキ其樣な事には少しも頓着なく殊に新聞紙上にまで此等の名吟が顯れるに至つて實に盛んなりと謂はざるを得ずソコデ道人も側の人眞似子眞似の好な男なれば何がさて默止て見ては居られず早速手提打とゝの云へる後ろ嬉を頼み來ッてポッ〳〵遣て見た處好きころ物の上手とは動かすべからざるの金言で句作未だ一万吟に滿ざるも其妙殆んど先輩を凌ぐ尤も是は只自分一人でさう思はれる丈の事でまだ他人の口から妙の一字を貰ひし事は無きなり然れば此頃友人某が俳句大集の企てあるを幸ひイヤや骨皮宗匠の腕前を謂はし三才五客とも殘らず引攫



ッてアハ三錢の入花は安かものだと鼾ッ鼻をビコ付せ他の出句者をしてポカンたらしめんと欲し其課題に就て一氣呵成朝飯前に遣らかしたる名吟は最初が蛙に音類を結んで「眼がかすむ駱駝のやうな婆アかな」其次が春雨に支体を結んで「春雨や丸藥にする鼻ッ糞」其次が蛙に武器を結んで「長刀草履ぐしやりゃイ蛙かな」の三句なり然るに或る一友人は失敬千萬にも是を打こなしてイヤ是は無茶だ是でハ丸で地口か洒落としか請取れない何故なれば眼がかすむのでは題意を失し鼻ッ糞が缺目で長刀草履と來ては武器にハ成らぬなどゝ遠慮會釋もなく一々クチを附けた道人豈に類逸を脹らさゝるを得ん去りながら些かたる風流上の事にて拳骨を振廻すのも大人氣無ければ枉て彼れに一歩を讓り失では斯う云た

らどうだらうと又い證に立戻りて「朝霞キコトヤ〳〵やかく
べ獅子」と遣り直した處是でもまだいや〳〵と首を振たり處
で道人の以爲らく此奴ァ迚も話し相手には成らぬ人は何と
云はふとも自から是ど信ずれば即ち是なり只其法則さへ嵐
されば詰り田を行くも畔を行くも風流として樂むの心は同
じ事と爰に骨皮流と云へる一派を設けて我れ關り消りのお
天狗樣を極む依て其近作の二三を擧れば

眼れ面してもめでたし雜煮餅
遣り羽子に負け白壹のお化餅
また寒し梅見戻りのハクション
掃草や爪の間に犬の糞
待ぼけの襟助もあり蟹の兵



## ◎町名の改正を望む

近來は改良改革改正など何事に就ても改の字を冠る事が流
行せり、成程改はあらためる即ち惡い處を改めて善くし不都
合な處を改めて都合宜くすると云ふ事なれば彼の角を直さ
んとて牛を殺し、枝を矯んとて幹を枯すやうな事さへ無けれ
ば實に改良は結構な事なり實に改正は望ましき事なり、故に
諸官省よりも改革あり市町村にも改正ありと云ふ樣な譯なる
が扨て其改正の副毛序に先に一ッの改正を望む事あり、汗は
如何なる事かと云ふに東京の町名即ち是れなり、抑々東京は
四里四方にして町數は八百八町と云ひ傳ふれど、維新以來新
開町の出來たるも少なからず、殊に市町村制度の革まりたる

に依で部部より市部へ編入の場所も多くある旁々、今は殆んど千何百町と云ふに至って居るなるべし、然れば地方の人などが偶々出京する時は左なきだにマゴ付く中に、例へば淺草にも須賀町新須賀町の二ケ所あれば、本郷にも須賀町あり、又四ツ谷にも須賀町あり或ひは下谷にも數寄屋町あり、日本橋にも數寄屋町あり京橋にも數寄屋町あり或ひは神田に佐久間町と元佐久間町の二ケ所あるて、南佐久間町と云へるはズッと飛で芝區に在り、或ひは紺屋町と東紺屋町は神田にあり北紺屋町南紺屋町西紺屋町は各々飛離れて京橋區の内三ケ所にあり、其他一々取調べ來らば市内の同町名は甚だ多かるべし、而して從來東京に住で居る人は已に耳馴れ場所馴て居るが故に、佐久間町が何ケ所あらうとも紺屋町が東西南北



共に飛離れて居やうとも、左程マゴ付くやうな事は無けれど、場所馴れぬ地方の人などの身に取ては隨分不便にして、夫が爲めに迷惑する事も多々あるべしと信ず、ソコで又た今一ツ不便なりと思ふにペッポウに長たらしい町名なり、例へば四谷元鮫ケ橋南町、四谷千駄ケ谷南信濃町、小石川小日向清水谷町、湯島天神下同朋町、下谷上三崎南町、淺草金龍山下瓦町、深川富岡門前東仲町、芝二本榎西町、芝白金三光町、芝櫻田太郎左衛門町、麻布澁谷上廣尾町、の如きは隨分法性寺の入道を免れず、イヤ是はッ珍らしい此節い何方にお住居です、私しは四谷千駄ケ谷南信濃町に住居ます、へー四谷千駄ケ谷南信濃町と云ふと何の邊です、四谷千駄ケ谷南信濃町と云ふのは是み斯う云ふ處を四谷千駄ケ谷南信濃町と云ひますので、と斯

云って居た日には丸で話興無く〳〵後光のメーリキンと云ふやうなもので只町名を饒舌るばかりに三十分や一時間は清れて仕舞ふなり、故に此長たらしき名前を縮めて短かくする事と稱は同町名を廢して一々違ッた名を改める事とを願ひ度なり、處でモウ一ッは日本橋から京橋までを通り何丁目で押通し京橋より新橋までの間を銀坐何丁目で押通し、又た日本橋以北万世橋までを何とし万世橋より上野までを何とするが如く、總て大通り其他一町名で押通せるだけの處に成べく何町何丁目〳〵と爲し取も直さず今の麹町の通りのやうに改正しならば餘程便利なるべしと思へど扨是等に關ふべくして行はれざる憂の上の水練か、但し又さうなった處で格別効能の無きものにや、斯く云ふ道人にも其實見當が付さ



れず一寸思ひ出したる儘、を書の如し

## ◎改良芝居の噂を聞て感あり

道人は性來不意氣な人間にして芝居の事などい至ッて不案内の方なるが此頃聞く所に依れば神田の三崎町とかへ神田座といふ新劇場が出來て此劇場は書來の芝居とい違ひ百事改良を旨とし從來の弊習を一洗し斯道の面目を改めて以て彼のトンチンカンのどたばた踊りに現を抜し涙をこぼす連中をして吃驚仰天瞳玉と眼玉とを宿替せしめんとの目的にて先づ其第一着に俳優を改稱して技藝師と云ひ狂言方を改稱して書記と云ひ又た頭取を樂屋番と云ひ樂屋番を小使ひと呼ぶ事とし其他何と云ひ彼と云ひ一々書稱を廢して新名

を附する由なるが成ほど是は宜い思ひ付にて若しも同座が其意氣を以て開場したならば定めし大繁昌大入なるべしと存ずるなりソコで道人の思ふに已に斯く一から十まで改稱或ひは改良する目的なるに座名のみ依然として舊慣に倣ふは甚だ不釣合なれば是も矢張り四角張て神田區新演劇場とか或ひは神田演技觀覽所とか命じて成るべく世間の人間に芝居と思はせぬ方宜しのるべきなり而して從來茶屋と稱すれど取て茶のみを賣るに非ず又木戸と稱すれど當節の如く煉瓦造りとなる以上は決して木戸に非ざれば此茶屋も改稱して觀覽人取扱所とし木戸も改稱して觀覽人出入所とし且ツ茶屋の主人を所長女房を副所長出方を觀覽人接待掛りとし其他木戸札を觀覽券木戸番を觀覽券取扱人樽敷を上等觀



覽席鵜を中等觀覽席土間を普通觀覽席大向ふを一段落觀覽席とでもすべし而して猶斯く名稱を一變する以上は右の觀覽券取扱人が評判〳〵入ッしやい入ッしやいと云ふも不似合なれば是には高評高評大商評今將に析木を撃て一帳を開かんとする處サア喝米〳〵拍手〳〵大拍手請ふ此演技を觀んと欲する人は速かに來れと吐鳴らしめ又た中賣の菓子賣とてもお菓子は宜しかなと云ふは甚だ不適當なれば是には諸君試みに此甘味を一喫せよ聊か欠伸を慰するに足らんと云はしめ猶さうなつて見ると常盤津何太夫脇何々とも云へざるは是は謠師絃師と呼び又技藝師の中にも女形小役などと云ふも不都合なるゆゑ女形を擬女技藝師小役を技藝見習生と改稱すべし然る時は見物人否な觀覽する輩も大に

其改良法に感染して一寸芝居の話をするにも、鎌倉氏足下は神田演技觀覽所に歩を抵たるや否や實に其技藝の高尚優美なる眞に迫ッて妙味應に掬すべし之を是れ愉と呼び快と叫ばずんば何をか愉と呼び快と叫ばんや然に彼技藝見習生の石童丸の如きは人をして悲泣措く能はざらしめたりなどゝ云ふに至らん嗚呼愉快なる哉

## ◎暑中見舞のれ世辞

骨皮道人は誠に義理堅い男なり、骨皮道人は實に如才なき男なり、已に義理堅く已に如才なければ是で先づ人間が丸くなつたと申すものなり、とは道人自から之を信ずるのみに非ず、世間の人様が皆なさう被仰るなり、けれども當節は何事も駄



據流行にして例へば土用の丑の日に鰻の丼を五人前パク付たと云ふも其証據無き時は又たゞ様の法螺が始まつたと笑はれ、自己ア暑氣拂ひに泡盛を三升グビ付たと云ふも、其証據を見せざれば誰しも本眞の事とは受取らざるが如し、故に道人とても証據不充分なるものは決して持出さず、夫には立派な証據が御坐るなり、諸君も定めし記憶し給ふならん、彼の歳暮なり年始なり寒中なり暑中なり、凡そ用文章の中にて巾を利して居る急所だけは、年々歳々其詞は同じく其文句は異らずと雖も、歳暮には御忙敷う御坐いと云ひ年始には御目出度う御坐いと云ひ寒中には御寒う御坐いと云ひ暑中には御暑う御坐いと云ひ其都度必らず御挨拶を仕り、冠婚葬儀があれば棺桶の跡に際て寺まで見送り、饅頭や海苔寒鐵砲

そドシコと背負て來るなどは何でも宜けれど、一寸程來にて
緩意な人に逢ても、雨天の日にい響陶敷いお天氣と云ひ快晴
の時には好いお天氣と云ふ是れ馬鹿や唖には決して眞似の
出來ざる事にして即ち義理堅くして且つ如才なきに非ずや、
而して道人が何故あつて斯く如才なく立廻るかと云に、元來
お世辭を云はれて滿氣味悪く思ふ者は只金貸と質屋のみ、其
他は概ねお世辭を以て尤めれば尤く治まるものゆえ道人は
其處を附込んで餘計なお世辭も並べるやうなものゝ、併し道
人は餘ほど差引勘定の細密い男なれば、如何に如才なく立廻
るとは云へ道人の身に取て有難くもない、彼の吝嗇坊や不人
情野郎に向つてまで頭を下げてお世辭はすさず、何となれば
吝嗇坊や不人情の人に向つて何程米搗バッタを極込むも所



謂る骨折損の草臥儲け何の役にも立ざればなり、故に道人が
諸君に向つてお世辭を遣るは、早く云へば賣本の入らないお
世辭を云ッてさうして後來益々御贔負に預らんと欲する蝦
鯛主義語を替へて之を云へば申を持て行て團子をさして貰
ひ袋を持參して煎餅を頂戴しやうと云ふ飛でもない反覆心
の有てなり、イヤ斯う何も彼も種を打明て仕舞ては裏理もお
世辭も安ッぽくなつて聞く人も馬鹿〳〵しければ斯く云ふ
道人も勿体味がないやうなれど、爰にお世辭をすし進さ
るを得ざるの時節到來したれば先づ其前觸をして置て、進べ
んと欲する所のものは即ち暑中の御見舞にぞありける
其處で以て其お見舞を申し述るに當り、又た熟々考ふるに其
文句に於ても學者流のコヲ〳〵と素人風のグニヤ〳〵と又

た丁寧と簡易との差別あり而して學者流を以て是れを云へば炎威赫々怡かも火傘の天を蔽ふが如く、煩悶身を措くに所なしと雖も崇樸幸ひに清寧素人風に依て是を云へば暑氣殊の外甚だ敷しへども貴家皆々様御揃ひ御機嫌能く、猶ほ是を口の先で云へばお暑う御座ゐます、是を廣告で云へば、暑中御伺ひと云ふが如く其云ひやうの種々様々にして彼の不動様が火事場の手傳ひにでも飛出したやうに、火傘天を蔽ひ煩悶身を措に所なしと云ひ、或ひい裏長屋の引越女房と同様極め手輕を專一に暑中御伺ひと云ふも、只其文句に於て長短及びゴツ〳〵グニヤ〳〵の差あるのみにて、時る處い何と書ても暑中見舞は矢張り暑中見舞の用向さへ足りれば夫でもウ宜しい決して餘計な手間隙を潰して藍紙の行列をさせるにい



及ばないと云へば云ふやうなものゝ併し夫れは討論會の時にでも擬ぎ出すべき議論にして、凡そ世の中の人に接するにい何事にも愛嬌と云ふものが無くていならぬものなり、然れば餘計な事でも長たらしく云へば何となく行屆きが宜やうに聞に、手ッ取早く無造作に遣つて仕舞へば、何となく粗畧に取扱はれるやうに思はるゝい、元是れ習慣とは云へ吾人共に同情同感なりとす、故に道人も其愛嬌を含んで馬鹿丁寧に出掛けんとの考へに御坐ゐなり、而して其本文い即ち左に、

一筆啓上一簡拜呈す箋敬具愚札を以てヤ上扨とや然らば抑々元來一体全体我々動物の親玉が飛たり跳たり稼いだり遊んだり食つたり飲だり起たり寢たり立たり坐ったりして居る此地球上に寒暑冷熱の變化あるは即ち地球の廻り

加減より生じて致す處なれば躍に向ッて苦情を訴へ愚痴を溢すとも迚も追付話しに非ざる事い赤ン坊と馬鹿とを除くの外何の何兵衛でも慣に熱知して承知の大呑込にはへども今年の暑氣程嚴き暑さにて甚暑炎熱の甚だ敷い之なく実蘇暑中前入梅の前まだ出梅にならぬ先は毎日〳〵空が曇ッて い雨がビショ〳〵降雨がビショ〳〵降ては空が曇り傘のない者は外へ出る事が出來ず外へ出る事が出來ねば内に居ると云樣な擬梅敷なりしゆえ此叙ア素敵だ此分で押て行ふものなら今年の暑中は極々涼しくして芝居の殿樣でい無けれど三伏の中に綿入を着て居るやうだらうと思ひの外ィヤハヤどう致して夫の川も此節は餘程の旱魃と見えて毎日〳〵斯の通りに根氣よく照付けられ若しも此身体が餡細工か金



花結やあのたならば直に融解で仕舞ふなるべしと思ふ程の苦しさ愛さほんに遣瀬が御座なくい折から御病人い此限に非ずとして御身体の達者なお方樣は例もながら相變らず御壯健御安泰御清適御機嫌克く御暮し遊ばされい段珍重斜めならず大慶至極結構重畳目出度御儀に存じ奉つり候隨つて骨皮道人も飯を食た時だけ腹を脹らかし健康此の如しとフンズリ返り居りい間保りながら恐れながら勿体なながら恐縮ながら御安神御放念御休意御心配之れなきやう願ひ奉つりい就ては暑中御見舞の驗しとして何がな一寸目先の變ッた世に珍らしい滋藥書の佃煮か或ひい虎の子の鍋詰か乃至又た富士の山を背負て行て天然の雪を一ダースづゝ進上したら如何なものかなどゝ實い遠くの親類近くの他人様と

も談合致したれど福樂雀の佃煮や虎の子の鐘詰い元々外交に關する事なり富士の山を脊負て歩行は國會の議決を經なければ相成らぬとやす事ゆゑ其樣な手數を掛るほどの事でもなく且ッ諸君い習な親類交際の中なれば斯樣な他人ッ間敷事をするのも如何と存じ故意と差控へヤし尤も避暑の場所は伊香保を始め箱根磯邊等其他處々に御座し間適宜にお出で遊ばさるべくし右聊か暑中御伺ひまで此の如くに御座し恐惶謹言頓首再拜目出度くしゝ

## ◎狂詩の功能

詩い毛唐人の寐言にして狂詩は日本人の寐言なりとは動かす可らざる古人の金言と云ふ譯でも何でも無けれど先づ其



位な見當をつけて居ても宜しいかと存ずるなり何となれば唐人的の詩といふ奴い志しを謂とか何とか云ふのが孔子樣の御遺言で此御遺言を又眞ッ正直に守つて居る人は動もすれば慷慨だとか悲憤だとか多く心中の不平を漏すの材料に使つて人生五十愧無功だの風雨多年苔石表雖題日本古狂生だのと旨く愚痴を溢し負せた者が上手と云れる樣に成て居るが爲に何樣に上手な人が作つた詩でも只へゝー成ア程と感心する計りで迚も面白いの可笑いのと云ふ譯にも行ぬ否な他人が面白おかしくエヘラアハラと笑つて居る處へでも扨斯樣な詩が出來ましたが如何で御坐る何卒御弁正をなどゝ出されやうものなら其へゝー成ア程の爲めに折角面しろおかしく笑つて居た興味も一時ぶちこわされてポカン

たらさるを得ず故に或人い詩を作るよう田を作れと云へり然るに我田へ水を引儒には候はねと狂詩に至つては決して左様なものに非ず例へば閻魔大王然不動明王乎たる親父殿が逆鱗まし〳〵て鍼苦茶頷上に尊菜筋を顯したる時に於ても阿爺さん此様な狂詩が出來ましたと差出せば閻魔急ち返じて大黒となりサア今日は寄越すかどうだ若し今日中に返濟の義務を盡されば明日は執達吏を差向て鍋釜皿小鉢より以て埃取火吹竹に至る迄封印を附ぞと世に怖しき借金取が來た時に於てもイヤ借ちやん其様にヤキモキ氣を揉み給ふな何事も圓滑に行なければ迚も永い浮世の御交際は出來ない時に斯ういふ狂詩が出來た永くも手間は取らせないから〳〵一寸御一覽をと差出せば流石の借金取もケラ〳〵笑ひ出して成程是真面白い斯云ふ心掛の宜い人とは知ずして些かたる私慾の爲に君の真心を害したるは今更悔恨に堪ざる所聊其罪を謝するの職迄に金も證書もなッちも入ないから証書に棒を引た上に當分の手當として金の千圓も只呉様な事は所詮あるまいけれども併し毛唐人的と日本流とを比較すれば殆ど此位な大差あるべしと信ずるなり

夫れ然り然るに近來は狂詩の道大いに衰へ依然として其日本流の寐言を存するは只團珍の一雜詰あるのみ尤も時としては他の雜詰にもポッ〳〵顯るゝ事いあれども或ひは平仄の濁茶苦茶なるあり或は唐人の寐言と格別の違ひなきゴッ〳〵のもの多くして寫の日本流を遣かす人樂なしナント困つた次第にあらずや而して日本流の寐言即ち狂詩といふ者

は如何なる鹽梅敷に作れば宜いかと云ふに成るべく俗談平話を主とし成るべく何人にも讀み易く解し易き文字を並べて夫で平仄の法に合ひたるを極上等とするなるべしと信ず何となれば若し平仄韵字にも頓着なく只滑稽の文句を並べ立るのみならば何ぞ文字に限りあるの狂詩に依るよりは事勝手次第な事の云へる狂文に作るべく猶屈指堅きゴッを並べる位ならば寧ろ唐人の寐言流に依る方至極便利なるべければなり併し人によると根が狂詩故韵字さへ踏ば平仄なんぞは何でも宜と云ふ人もあれどさう云て仕舞た日には物あれば則ありと古人の云た事も反古になる也イヤ斯う理屈づくめに成ては花見る人の長刀と一般だが兎に角狂詩は狂詩らしく遣く貰ひたく且つ前段にも申し述べたる如く狂



詩の功能い實に莫大なれば何卒唐人流の寐言を打棄て充分に狂詩の盛ならん事を希望仕るなりそこで道人の思ふに古來より此寐言を上手に言た人は澤山にあれども其中でも宇可山人などは規則も崩さず彼俗談平話を主義とせし先生故先づ此先生の作例によつて其眞似をすれば多分間違ひ無るべし依て道人が記憶する所の一二を記せんに

着京

遠越山科渡堀川却勝小涙上京年祇園清水知恩院金閣登無狩見傳

祇園晩歸

身似大星遊興時仲居相送赤前垂醉來倒臥鴨川岸遊僧當年水雜炊。

是等は就中有名な狂詩にて殊に若京の時の如きは僅々廿八字の中へ地名寺號人名等を七ツ讀み込みたる手際は後毛唐人の蛾眉山月の形五地の名も遠く尻尾を卷て逃ると云ふ評判なりとは云へ斯小理屈を云ふ道人に此眞似が出來るかと詰る人あらばイヤハヤ一言もない次第に御座候

◎おどけの種々

◎折衷動物の譜

○驚に烏の首

烏の仲間でゝ阿房と笑ひ
驚の仲間でゝ白羽ツくれ
て烏合ずハヲ何處へ行た

ら此の黑白が分るやら夫さへも驚眞黑ア、困まつたと只烏驚〳〵

○狸に虎の首

虎の威を假る狐でゝ無うて虎の首を假りた狸めが虎狸見よがしの腹皷とは面黑い〳〵處で一ず

と一句浮んだ

皷腹する氣なら虎穴に入よ人

◎新作一ツとセー節

此頃友人某々等と申し合せ娯遊會と稱する團體伸しの一團體を結び毎月一度づゝ打寄りて酒を飲み餅を食ひ謠ふも踊るも各々の勝手氣儘と云ふ國則にて即ち其第一回を

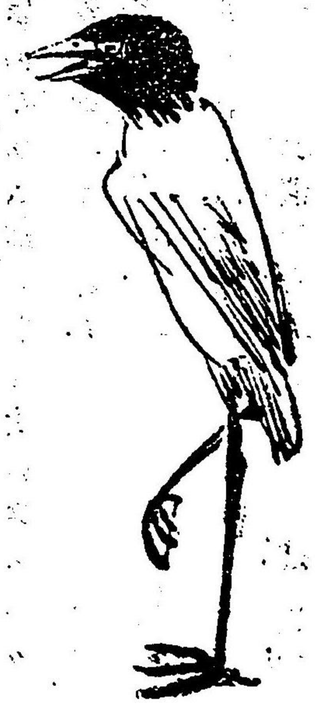
是等は就中有名な狂詩にて殊に若京の詩の如きは僅々廿八字の中へ地名寺號人名等を七ツ讀み込みたる手際は彼毛唐人の蛾眉山月の形五地の名も遠く尻尾を卷て逃ると云ふ評判なりとは云へ斯小理屈を云ふ道人に此眞似が出來るかと詰る人あらばイヤハヤ一言もない次第に御座候

## ◎おどけの種々

### ◎折衷動物の譜

○鷺に烏の首

烏の仲間でゝ阿房と笑ひ
鷺の仲間でゝ白羽ツくれ
て烏合ずハヲ何處へ行た





ら此の黒白が分るやら夫さへも烏眞黑ア、困きつたと只烏鷺〳〵

○狸に虎の首

虎の威を假る狐でゝ無うて虎の首を假りた狸めが虎狸見よがしの腹皷とは面黑い〳〵處で一ずと一句浮んだ

皷腹する氣なら虎穴に入よ人

### ◎新作一ツとせ節

此頃友人某々等と申し合せ遨遊會と稱する墨皷伸しの一團怠を結び毎月一度づゝ打寄りて酒を飲み餅を食ひ謠ふも踊るも各々の勝手氣儘と云ふ處則にて即ち其第一回を

某割烹店の樓上に開きしに此日會する者無慮五十餘名面して皆種々の隠し藝を爲して賭を外さしめたるも獨り道人のみ無藝大食にて別に喝采を博する手段なきに困りたり去ながら彼も人なり我も人なり同じ男一疋に生れて只ムシヤ〳〵食ひガブ〳〵飲で呑淵然酒蛙突乎たるも餘り氣の利た次第にもあらずと即席に一ッとセー節を作つて狠の遠吠を試みし事即はちち左の如し

一ッとセー　日頃仲よき人々が、コヲヤエ睦まじく、開く今宵の娯遊會い、面白や、

二ッとセー　平生勉強の氣保養に、コヲヤエ打とけて、毎月一度の智慧くらべ、面白や

三ッとセー　皆さん粹士のお揃ひて、コヲヤエ調子よく、



謠ふ二上り三下り、面白や、

四ッとセー　酔て管まく人もなく、コヲヤエにこ〳〵と、機嫌上戸の笑ひ顔、面白や、

五ッとセー　いつも愉快の催ふしは、コヲヤエ各自に、我も負じと隠し藝、面白や、

六ッとセー　無性矢鱈には返り、コヲヤエ腹へらし、茶番手躍り色氣なく、面白や、

七ッとセー　なんの苦もなく遣り通す、コヲヤエお手際い實に驚く事ばかり、面白や、

八ッとセー　八ケ間しいほど賑やかく、コヲヤエ騒ぎ立、老若尊卑の別もなく面白や、

九ッとセー　此處は自由の不禮講、コヲヤエ遠慮なく、酒

が取持つ此の愉快面白や、

十どセー　當時世間の誤多つきを、コリヤエ餘所に見て、

お膳で茶沸す氣樂さよ、面白や。

## ◎お菓子な口上

今度友人が上戸の向ふを張について是非その口上を饒舌繰て呉よとの茶呑に如何さま餅は麩屋で無ければ旨く行ぬい餅論の事宜しい〳〵何か新餡の旨い事もあるならんと例の早呑こみで膝とも團子したなれど元々〳〵腹はカスディラ一升袋は矢張り一升しう種がないト云て曰をつけば大杆怒られるだらうし八釜しい事を並べ立れば是も又た麩棒ならんと餡汁よりい產が易す〳〵と此處に開業せし新店は何品に限



らず製造が上手で味が旨くてお負に直段が安印し是ほど三拍子揃つた家は恐らく他には御座るまいサア〳〵皆さん入ッしやいサア〳〵皆さん買しやんせ春の日永の御退屈秋の夜長のお目覺しオヤ珍らしいお客樣オヤ坊ちやんが泣なさる處へ一寸あの御菓子マアお一個と差出せば彼方もコッコリ此方もニッコリ是が即いち大福餅イヤお菓子の功能いまだある未だ有るあるい澤山あるへい糖嵐暮年玉お手土產折詰袋御壜裏を專一にお好み次第御意任せ極お手輕に調進致せば乾菓子の隅から西の果まで何卒御評判御贔負のほどを偏へに直買奉つると主人に代りて胡麻菓子の口上を述る者い智惠も淺草凡倉前の骨皮道人

## ◎頓智問答

或時暑さいあつし氣眠はさす、實にどうしたら宜のらうかと、只た一ッの身体を荷厄介にする折から、不圖思ひ附いて本箱掃除に取掛りし處、其古本の中よりヒヨコリと顯れ出でたるは、武智光秀にいあらずして即ち此頓智問答と云ふ一小冊なり、道人い元古本好きゆえヒタリと其處へ胡坐をかき、ハテ何人の作なるの中々面白く出來て居る是等が先づ滑稽の神隨とでも言つべきものならんと感心しァ、之を讀む中、不思議にも暑さを忘れ眠氣も何前へやら去りたれば、早呑込みの道人は之を眠氣覺しの咀呪本と心得たり因て其中解し易き部分だけを拔萃してァ、暑い〳〵ァ、眠い眠いのゆ方々に





矢張りゆ眠氣覺しとして、御覽に入れ奉る、尤も中には道人の屁馬も交り居りい

但し○印は問ひ△印は答へなり

○水を汲みとむ壺を瓶と い如何ん△鍋の手をつると云ふが如し

○女の胸にあるを乳(地)と云ッて男の胸にあるを天と云いさるは如何ん△めかけを妾(小)と云ッて本妻を大と云はざるが如し

○曰をめぐらすを引くと い如何ん△新らしき粉な通しを篩(古い)と云ふが如し

○智惠の足りない者を天保錢と い如何ん△婆ァ育ちを三百安いと云ふが如し

○米を入れて搗ながらカラ白と云如何ん△一ヨたらず入れて千石通しと云ふが如し

○黒染の古びたるを羊糞色と云如何ん△丸ばかりの紋所をこく餅と云ふが如し

○鳥にもあらぬ地名を目白と云如何ん△茶にもあらぬ鳥をほうじろと云ふが如し

○人の自慢するを味噌とば如何ん△よく働く人をマメと云ふが如し

○水草にもあらぬを水仙とは如何ん△庭にあれども山吹と云ふが如し

○材木屋にあらぬ呉服屋を白木屋とは如何ん△綿ばかり賣らねども越後屋と云ふが如し



○鉋にもあらで偽りを云ふを嘘を突くとは如何ん△打擲せぬに饒舌る事を口を叩くと云ふが如し

○非人の事を嘗もせぬに古事記とは如何ん△古い事を嘗いても新聞紙と云ふが如し

○末になりても初茸とは如何ん△新米でもをはり尾張米と云ふが如し

○風も吹かぬに連木をこがらしとは如何ん△雷人ならぬ味噌漉を闘守と云ふが如し

○煮ても食ふものを生貝とは如何ん△今釣りあげてもほしがれいと云ふが如し

○同じ事を太郎兵衛とは如何ん△嘘をつく者を万八と云ふが如し

○空に貧福の見もせぬに天びんぼうとは如何△有福な暮しをして居ても仕舞へ屋と云ふが如し

○楽器にもあらぬ物を枇杷とは如何ん△かけ物にあらぬど無花果(一軸)と云ふが如し

○神無月ありて佛無月なきは如何ん△水無月ありて火無月なきが如し

○權兵衛八兵衛が製造ても大八車とは如何ん△重荷を持つ男を輕子と云ふが如し

○花にもあらずして櫻炭とは如何ん△早く火におこる物を消炭と云ふが如し

○糸も通さず縫もせぬ材木を梁とは如何ん△柱の穴へ通しながち貫と云ふが如し



○病ひに血(地)の道あれども天の道なきは如何ん△癲(天)癇は

あれども地かん無きが如し

○草花にもあらぬ紙を小菊とは如何ん△能役者にもあらぬ紙を奉書(實生)と云ふが如し

○子供も渡りながら親父橋とは如何ん△考へなく渡ッても思案橋と云ふが如し

○里程あらぬ豆腐の數を一丁二丁と云ふは如何ん△外にも量らぬ高山の道を一合二合と云ふが如し

○女でありながら赤染衛門とは如何ん△男でありながら采女と云ふが如し

○一ッの考へをも思(四)案とは如何ん△一ッの巧みをも工(九)夫と云ふが如し

○とまり木にもあらぬを鳥居とは如何ん△魚類にもあらぬに鰐口と云ふが如し

○一ツの日輪を天十様とい如何ん△お月様を十三七ツと云ふが如し

○起て居ても猫(寝子)とは如何ん△傍へ来ても猿(去る)と云ふが如し

○桂馬の高飛を歩の餌食とは如何ん△はさみ將棋に居食あるが如し

○細き糸にて拵へながら太物とは如何ん△剣で織もせずしてケン布と云ふが如し

○睦まじき者をうまい中とは如何ん△不實者をまづい心と云ふが如し



○抔を軽がと持ておもひ甚とい如何ん△手もかけずして押へたと云ふが如し

○實のある物をから蝋とは如何ん△木の實にもあらぬにいまぐり(栗)と云ふが如し

○稲荷をまつるに初午とい如何ん△鷲神社の祭りを酉の町と云ふが如し

○瀬戸物ならぬ染物をさら紗とは如何ん△織物ならぬ器を錦手と云ふが如し

○知らぬ子に喰はせても汁粉(知る子)とい如何ん△外に喰ひ方もなきに自在餅と云ふが如し

○鳥にもあらぬ茄子を燒て鴨燒とは如何ん△小鮒を燒て雀燒と云ふが如し

○一ッ立てながら對立とい如何ん△屏風二ッを一双と云ふが如し

## ◎初夢出鱈目判斷

○牡丹餅で頬邊を撫られると見れば必らず旨い話しあり尤も當にはならず

○木に餅が生たと見れば他人に欺される事あり用心すべし

○雷が鳴たと見れば ゴロッキ來る

○金を拾ふたと見れば警察へ届ける事あり

○ヘゾレケに酔拂ッたと見れば失策事あり

○鐵槌か川流れをすると見れば頭の寒らぬ事あり

○賊布或ひは裏口の戸を叩くと見れば必らず散財筋の事あり



○無茶苦茶に轉ぶと見れば名の知れない癌が出來ると知るべし

○圓遊と白眼ッ競をしたと見れば おはなに負るの前兆なり

○大風呂敷を廣げたと見れば必らず揚足を取らるゝ事あり

○眼から火が出たと見れば必らず痛い事あり

○雲を掴むと見れば山師に引掛らるゝ事あり

○兜を脱たと見れば降參する事あり

○苦虫を噛潰したと見れば心中甚だ不滿の事あり

○寒中に丸裸体で居たと見れば必らず風邪を引くべし

○高利の金を借たと見れば必らず執達吏の御厄介になる事あり

○山の神に角が生たと見れば必らず夫婦喧嘩あり

○ゲラ〳〵笑ふと見れば何か知ら可笑き話しあるべし

○越中犢鼻褌を貰ッたと見れば當事は皆な向ふから外れると知るべし

○泣ッ面を蜂にさゝれたと見れば扶持に離れて借金取に責らるゝ事あり

○自轉車に乘と見れば投票の二番札と知るべし

○運動費に差支へたと見るときは撰擧の結果甚だ不案心なり

○戸締を忘れたと見るべば必らず盜難あり

○手が長く伸たと見れば後で縛られる事あり

○福の神が舞込んで來たと見れば必らず錢の儲かる事あり



先はあら〳〵斯の如し此跡い宜しく推して知るべし

おどけ文庫終

明治廿七年九月廿七日印刷
明治廿七年九月廿七日發行

版權所有

發行兼印刷者　東京市日本橋區新右門町十番地　町田宗七

印刷所　同所　町田活版所

發賣元　同所　扶桑堂